心にして、自分の立つて居る立場を明かに自覺しなければならぬ。個人の信念が必要なのは、此の點にある。然し信念と云ひ、自覺と云つても、唯現在の己れのみを標準にするのでなく、現實の因て來る所の源を探り、この源に基いて、將來を指導する光明を發見しなければならぬ。汝の立つ所を深く掘れ、其處には泉が湧き出す。自分の立場を本位とする事は、何れの人にも缺くべからざる事であるが、その立場に基いて、深く源泉を探る精神が無ければ、これから前に向つて行く方向にも迷ひを生ずる。個人の人格は、此くの如き意味で、自分の立場を自覺し、事前の理を尊重し、傳來の權威に服從することに依て、初めて完全になる。

佛敎の書物にも云つてある、『未だ根本なくして枝末あるものあらず、況や三才の中の最も靈なるものにして本源なからんや。我れ今人身を稟け得て、而かも自ら從つて來る所を知らざれば、曷ぞ能く他世の趣く所を知らんや、奚

ぞ能く天下古今の人事を知らんや。』此の樣な考は、獨り佛敎とか宗敎とかの立場から云ふべきことであるばかりでなく、如何なる研究、如何なる思想にも必要な覺悟である。此の如く物事の源流に溯り、事前の理に依つて、事實の現象を照らし見るのは、吾々の思想を高くし、從つて又基礎を深くする所以である。權威の思想も此の覺悟から生じ、理想の力も、此の自覺の中から生じて來る。現實主義を中心にして居る敎育社會に、權威の思想が段段に消滅して往くと共に、理想の力が益々墮落して往くのは自然の勢である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日の德育は、敎育勅語を元にして居るといふが、所謂る元にして居るといふ意味は、どれだけ事實に行はれて居るか。隨分多くの敎育者に就いて敎育勅語の大本、即ち皇祖皇宗の御遺訓であり、又祖先の遺風であり、將來の日本國民が共に守るべき道、中外に施して悖らない道、其の大なる道の意味を問

ひ糾して見るに、之に對して明白の觀念と確乎たる信念を抱いて居る教育者には餘り多く出會はない。「父母に孝に、兄弟に友に」といふ項目は、色々教へて居るやうであるが、其の教育の淵源となり、國體の大本となつて居る、皇祖皇宗の御遺訓の中に、鴻大なる君德が現はれ、重大なる理想が示されて居ることを說けば、それに對して不思議だといふやうな心を抱く人が多い。例へば神武天皇の勅語に『上は即ち乾靈國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然る後六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて以て宇と爲さん事、亦可からざらんや』といふ言葉があるが、此の意味を教育者が如何に解釋して居るか。曾て此の御遺訓を教育者に示して見たが、此等の雄大な理想、幽遠なる規模に對しては啞然たる有樣であつた。殊に其中の或る人は、それに對して疑問を提出した。日本書紀の出來た時には、支那思想が這入て居たから、其の影響で斯う云ふことを書いたので、二千數百年前の神武

天皇の時に、此樣な理想があつたとは思はれない。此の如き理屈の疑問を提出した人もあつた。假令へ文句に於ては支那の文字を使つてあるにしても、支那の何れの時代にか、此の如き理想が現れて居るか。それだけで見ても、此等の御遺訓は、勿論支那の眞似でなく、又後代の造り事でない事は明白である。此の如き理想は、即ち皇室を中心として日本國民元來の信念であり、又國家の組織を爲して居る淵源である。それ故に勅語にも、明に之を稱して、教育の淵源と仰せられてある。人は口を開けば、二千五百年の歷史といひ、萬世一系の皇室と言つて居るが、此の歷史と云ひ、萬世一系といふのは事實、現象であつて、其の根本、即ち事前の理は、此の如き鴻大なる靈德、重大なる理想に在つて、神武天皇を始め、御歷代が此の大趣意を宣揚あそばされ、忠良なる臣民がそれを奉行し來つたのである。歷史の事實をば見ても、其の根本を思はなければ、此の國體の大義は到底見ることは出來まい。

總て物事を現實の立場から見れば、事前の關係といふことは見られないやうになつて來る。近い例で云へば親子の關係に就いても、若し單に現實といふだけで見れば、親と子と體軀は二つになり、其外教育の違ひもあり、思惑、主義、感情も違つて居るから、その現實から云つて親子の關係を說かうとすれば、唯親といふ名あり子といふ名があるのみだといふやうにも見えやう。併ながら之を根本に溯り、事前の理から看れば、自分の生命は即ち親の生命の續きである、所謂る切つても切れない因果が繫がつて居る。如何に思想或は教育の度合が異なつても、親は何處迄も親、子は何處迄も子で、其の關係は不變の關係、從つて親の權威は動かすべからざる權威である。子の親に對する孝行には、勿論其の恩を思ひ、德に報ゆるといふ精神もあるに違ひないが、此の如き愛情、感情の源には、自分の因つて出た源といふ動かすべからざる力がある。其の力が即ち權威の源で、之に對すれば即ち尊敬の念となり

從順の德となる。孝行には此二つの方面、即ち德を慕ふのと權威に服從するとの二方面が、備はらなければならぬ。此の關係を見ないで、孝行を唱ふるが爲めに、功利主義のやうに、唯恩に報ゆるといふやうな說明が出て來る。單に恩に報ゆるといふことを以て孝行の說明をしやうとすれば、恩の少ない親には、それだけ孝行を薄くしても宜い譯になる。此樣な思想は今の社會に隨分擴がりつゝあると思ふ。又孝行を大切な德とする人であつて、此樣な思想を明かに唱へて居る人もある。

或は師に就いて見ても、單に現實から云へば、師は自分の知識を弟子に與へる人間である。某小學校生徒の云ふた言葉に據れば、先生とは木板に字を書き、書物を敎へる動物なり、といふことになる。此樣な見方が生徒の側に在るのみならず、敎師の側にも隨分廣がつて、學者は所謂る知識の切り賣をする、生徒は授業料を出してそれを買ふ。賣つた者は其金に依つて自分の生

活を維持する、生徒は買ひ得た知識を資本にして、又以て利益のある事業に從事する。斯くの如く師道が衰へたと云つて憤慨する人もあるが、その衰へたのは、生徒の方面に罪あるのみでなく、師匠の側にも確かに罪がある。教育者なるものは、勿論教師の持つて居る知識を生徒に與へることは直接の仕事である。併ながら之を事前の理から見たならば、教師の知識は、決して彼れの占有物——專賣でなく、眞理は萬世に渉つて人類の共有、今日の學問、知識は、數千年來、世界の古賢先聖が探り出し教へ傳へてくれた、人類の大なる遺產である。其上に此等の眞理は、單に人間の精神が造り出したものでなく、人間まだあらざる前から、世界を通じて行はれて居る不易の理である。其の理が古賢先聖の腦髓に映じて、彼等の智慧となり、それが人類に傳へられ、後世の學者等は、それに基いて研究を續け、それに從つて益す世界人生の眞相を、精しく又明瞭に知り得るやうになつたのである。即ち今日の學者なる者は、

此の天地の大眞理から資本の供給を仰ぎ、數千年來の賢人、學者の事業を承け繼いで、大切な職務を行ひつゝある人である。而して學者が教育家として働けば、古來の傳承の大切なる眞理を、今自分の後昆に傳へる役目を爲して居るのである。それ故、教師が教場に立つ場合には、自ら覺悟して、自分は單に一個人として此處に立つのではなく、天地の眞理を代表し、古賢先聖の代官として立ち、生徒をして眞理の體得者たらしめ　古賢先聖の仲間入りをさせるといふ大抱負がなければならぬ。又生徒の側でも同樣で、唯物識りになる爲に、目前には自分より多く知つて居る先生に就いて居るのではなくて、此の如く大な懿德と權威のある代表者から、大切な眞理の相承相傳を受けつつあるといふ信仰がなければならぬ。教師にも生徒にも、此の覺悟があつたならば、師道の衰へるといふ筈はない。師道が衰へるといふのも、詰まりは教師自らが自分の得て來た知識に對し、又其の眞理を示してくれた古賢先聖

君德の淵源

に對する尊敬の念がない爲めに、即ち自分の持つて居る知識に付いて事前の理を想はない爲め。それ故に生徒に對して權威を以て臨むことを得ない、生徒も亦權威に對する尊敬を以て之に對しない。

それから君に對しての忠義も亦同樣である。今日の教育社會には、日本國民の現在の關係を色々に說明して、多少其の源に溯つて見やうといふ傾向はある。併しながら君臣共に祖先を同じうして居るから、君臣の關係が密接であるとか、或は二千五百年來撫育の鴻恩があるから、臣民は天皇に服從すべし、といふやうな思想が、教育社會に勢力を占めて居る。これ等は幾らか源に溯つた見方であるけれども、尙ほ現實主義の弊を免れない。吾々から見れば、君主の御威德は、即ち天地經理の權威を代表なされて居るのである。日本の歷史で云へば、天照皇太神はこの神德を身に體せられ、しかして豐葦原中津國は、我が子孫の知らしめす邦であると御委任になつた。太神の靈德は、

單に血族を同うして居る臣民だけに及ぶものでなく、又單に其の御德を受けたといふものを支配するだけでなく、萬物を照らし、其の秩序を整へ、之に背く者は之を征服するといふ大靈德の發表である。即ち日本書紀には、此の神德を稱して「光華明彩照徹於六合之內」とある其の神德である。此の權威を承け繼がせられるのが即ち皇室で、吾々臣民は、自分の生まれる前から、祖先から、此の神德に服從し來つたのである。而して其の服從は、單に力に對する服從ではなく、德に對する信順歸敬である。それ故に、其の關係は其の恩德の有無よりも以前に成り立つて居る關係である。又外國から歸化して來た者でも、勿論この化育に與かれば、その仲間入をして仕舞ふ。

此の關係は、單に現實の歷史に現はれただけの關係ではなくして、此の國あり此の民ある以前から、定まつた事前の理である。それ故に此の關係は、現在に侵す可からざるもの、從つて天皇の權威は、此の意味で絕對である。

吾々の皇室に對する忠義といふことは、直接に皇室の御爲めに盡すとか、國の爲めに戰ふとかいふ場合だけではなく、社會の秩序を立て、人倫の常經を行ふ上に於て、總て誠忠を盡すのが即ち忠義の全體である。それ故に教育勅語にも、『父母に孝に兄弟に友に』以下『一旦緩急あれば』までの諸の德行を總括して、それ等は皆天壤無窮の皇運を扶翼する所以であると教へておいでになる。是は即ち君臣の關係から出て來た必然の結果、人間社會に於ける忠義の眞義から出て來る必然の結論である。軍人に賜はつた勅諭の中にも、軍人としての德五つをお擧げになつて、最後には、之を以て單に軍人だけの德とせず『天地の公道、人倫の常經』であると教へてお出になる。此の意味は、忠君愛國に對する事前の理を見なければ明かにならない。

日蓮上人の言に『世の中に尊むべきもの三つ、師、主、親是れなり』とある。此の三つの者は人倫の大本、又從つて教育の淵源である。吾々は師、主、親に

對して、勿論其の鴻大なる恩德を思はなければならぬ。併しながら恩德だけでなく、是が即ち天地人生の大本源を代表する權威であると云ふことを知らねばならぬ。此の權威は、單に現實の關係から生ずるものでなく、人生の大本、天地の公道から生ずる理の發表である。それ故に此の理を能く覺悟しなければ、此等の權威を尊むことも不十分になる。今の教育社會に權威が衰へたといふとも、畢竟は現實に拘泥して此の理を見ない、從つて理に基いた權威を見ないからである。近い一例を出して見れば、近年二宮尊德翁の報德主義を鼓吹する人があるが、實際を見るに、多くは尊德翁の經濟的組織の方面を重んじて、所謂る報德の根本には餘り目を着けない。現に報德といふことの中でも、天地といふ一事は拔きにしてある。吾々は之を稱して大割引大安賣の報德教と稱する。此の如き報德教を以て地方自治や教育の根本にしやうとするから、利益は多少擧がるにしても、其の末の弊に至つては利益より一層激し

きものがある。報德教の中に果してどれだけ權威の思想があるか。又師、主、親の權威に對する吾々の忠節、孝行の大義を何處まで說明して居るか。玆に一々報德教の批評をするのではないが、此樣な主義を以て萬事を律しやうとする樣な風潮が、教育社會全體を支配するやうになつたならば、皇祖、皇宗の御遺訓、皇國の大本、國體の大義は如何にして之を現はし得るか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

權威は、萬事萬物その基く所、依つて出た源あるを悟つて、之を尊重して始めて成り立つ。秩序に基いた慈愛と眞正の權威とは、同一の事を二つの方面から見ただけの事である。

『源なき流れは絕え、根なき草は枯れ、親なき兒は賤まる。』苟も權威ある位置にある人が、自らの權威の源泉を思はなければ、即ち權威を私有する者で、その根を潤ほす慈愛は枯れ、その執行する權威は暴威とならざるを得ない。

いつの世にでも、權威を無視する思想が出るのは、此樣な濫用、暴威の壓抑に反抗して起るもので、その反抗的精神が昂じては、その濫用に抵抗するばかりでなく、正當の權威も併せて無視して、何れの方面でも、自らの基く所を思はず、偏に我執我慢を主張する樣になる。此と共に又、社會の事情に、色々個人の慾望を刺激する事が多くなり、人の心が敬虔沈思の餘裕を缺いて、只々現在目前の刺激に動かされる樣になつては、根を棄て源を忘れて、權威には目もくれない樣になる。今の世には、宗教でも道德でも、又特に教育には權威が墜落したとの嘆聲をきゝ、又その事實に遭遇する事が多いが、此の兩面の原因が一緒に襲ひ來つたのであるから、その根本を矯正しないで、形式に焦慮したとて、徒に廢頽の勢を增すのみに終る。今の社會が、權威の衰頽に驚き始めたのはよいが、教育界の保守的反動などは、精神のない根なし草を植ゑると同じく、却て反抗悖逆の勢を激成するに止まる事は、火を睹るよ

りも明かである。特に今の日本の如く、內外の潮流が共に權威墜落の勢で相合して居る時に當つて、祖先崇拜や神社崇拜の形式で之に逆はうとする如きは、啻に現在を觀る明のないのみらず、實に權威の何物たるかを思はないから出る事で、その樣な手細工で强制して、それで此の潮流を回へさうなどと思ふ考へそのものが、即ち既に權威の濫用である。

何れの世といへども、その社會の氣風に長短利弊の伴はないことはないが、今の明治の世は、日本の歷史中で希有の盛世であつて、同時に奇妙な思想上の亂世である。その大體を總括して云へば、德川時代の權威濫用、即ち形式道德の暴威に對して起つた反抗精神と、世界交通のために新に起つて來た目前の刺激慾望とが、相合し、その上に道德や敎育の人心を支配すべき勢力は、尙ほやはり德川時代の武士といふ一階級の思想がその餘威を振つて、そのために逆潮相鬪つて居るのである。而してこの三つの原因は、何れも揃ひも揃

思想上の亂世

うて、眞正の權威を無視し、又人生の同情慈愛を踏み附けにして、玆に未曾有の亂調を來したのである。今この三方面を觀察して見やう。

德川時代は、足利以後の亂世を平定する必要から、何事も平和を目的とし、現狀維持を手段として、相變はらずといふ事が最もよい事となり、この相變はらずを維持するためには、嚴格至極究屈極まつた階級制度で社會を統御し、人情を壓抑し、個人の人格を無視する法律主義で人心を拑制して來た。元和偃武當時の政策としては此等は已むを得ない事であり、又戰亂に飽き果てた人心は、一時は之に服しても、それで永く人心を悅服する事が出來やう譯がない。然しながら、幕府の統治と封建制度なるものは、元々日本國家の統治上の眞權威に背いた政治であるから、その應用を自在にし、活き〳〵した政治や德敎で人心を率ゐては、忽にして執權者自ら假面の權威を墜とす患があるから、どうしてもその形式を固持する要があつたのである。此が即ち德川

時代を通じての病源で、その形式の維持は、どうしても權威の濫用、即ち人心の壓迫より外に道はなかつた。戰ふべき戰場は目の前になくとも、武士は兩刀を腰にして戰ふ用意をして居なければならぬ。その精神の緊張もさうさう永く張り詰めては張り切れず、そこで表面は兩刀でも、裏面は放逸にも流れる。そこで『文武文武で、夜も寢られぬ』事になつて、形の方がやかましくなる。社會の關係には水平同等の關係はなくて、何事でも上下のみになる。人に會つても、いきなり用事を云はず、先づ時候の挨拶をしてかゝる。目の上には面を向けて物も云へない。親子夫婦の間でも、會話にも手紙にも敬稱づくめでなくば、何事も話せない。百姓町人はどこまでも百姓町人で頭は上がらず、大名の子でも二男三男は、他に養子にでも行かなければ、部屋住ゞひで、冷飯の一生をくすぶつて暮らす外ない。此等の事は、今更云ふまでもなく、人のよく知つて居る事であるが、然し此等が總て權威の濫用である事、即ち

形式道德の維持のために出て來たものである事と、又此の氣風が今の社會にも尙ほ暴威を逞しうして居るのは、特に注意を要する事である。

權威の濫用には、必ず反抗が起る。德川幕府が德敎の機關に利用しやうとした儒敎の中からは、天理人道の大本を宣明する敎へも出て來る、尊王の大義を唱へる主義も現はれて來た。水戸學派と闇齋學派だけを見ても、權威の濫用を正當の筋途に戻さうとする人心至誠の聲は朋かで、此等は維新の大業を贊助して、根本から國家統治の眞權威を回復した。此の方面は、反抗にしても、正々堂々の陣を張つた者であるが、それ以外、社會一般の反抗的精神は、時の經つと共に益々現はれて來て、或は旗下武士に反抗し死鬪する任俠にもなれば、義理の束縛を破つて人情に殉ずる情死、又それを歌ひ、それに同情を表する淨瑠璃にもなつて、元祿の花を咲かせた。それでも拘束壓制は中々に根本からは破れない。そこで人を愚弄した逸民も出、世を冷笑する諷刺に

もなり、或は又壓抑の下にも、歡樂の天地を求める奢侈逸樂の風が社會を風靡して、文化文政の所謂る文明を作り出した。然しそれでも、階級の鐵鎖は固く人を縛り、社會を固めて居る。幕末の風雲に乘じて天下の大勢を轉覆する運動に加はつた者が、各藩とも青年の小身者に多かつたのは、實にこの窒息裏の鬱勃が一時に爆發したもの、維新の變革は、上は皇室の靈威と、下は此の反抗の爆發と相合して出來上つたのである。

天地の公道に基き、萬機公論に決し、庶民をして各その志を得しめやう。是れ實に眞權威を回復して、今までの權威濫用を打破する大宣言であつた。然し山顛から轉び始めた石は、山の下まで行かずば已まない。濫用權威、形式道德の打破は、轉々して益々その勢を加へ、終に一切の權威を無視する方向に進み、それに加へて新來の西洋思想には、かてて加へて近世文明の反抗思想が大勢力となつて來た。近頃、大逆事件が出てから、世間では俄に西洋

思想は總て反逆思想であるかの如く思ひ、日本元來の道德には此の樣な分子はないとして、その結果、只管排外といはうか、又は外國畏怖の論を盛にする樣になつたが、此は事の一面のみを見たもので、此の潮流を回すには、單に外國思想を排斥するばかりで功を奏するものでない。何故といへば、反抗思想、乃至反逆的傾向は、西洋近世の文明を彩る大切な色彩であると共に、又德川時代の束縛に反抗して起つた明治思想（國體の上でなく、社會の道德の上で）の一特色なので、玆に二つが同氣相求めた譯なのである。單に外來の方面を杜絶しても、轉び始めた石の處置は、內から之を片附けなければ出來る筈もなく、又今の世に、只弊害を恐れてそれだけを拒絶しやうとしても、出來る譯はない。西洋の近世文明が日本に入つて來て、權威を無視する勢力を養ふのは、勿論交通と商工業との發達に伴ふ目前の刺激が、個人の慾望を增長して、現實主義と我利我利根性とを作り出したにあるが、而かもその由

つて來る所は、丁度、日本で德川時代の形式主義に反抗する思想が、明治の一特色になつて居ると同じ工合の性質が、西洋の近世文明に固着して居るからである。この眞相の由來を思はないで、徒に西洋思想を恐れるのは、實にこちら自らに權威ある思想信念に缺けて居るためである。

西洋の近世文明については前にも少し述べたが、今日までの近代文明は、思想の上では主として批評的、又は反抗的、破壞的の方で進んで來たのであつて、それが舊來の權威に反抗するばかりでなく、餘勢の進む所、一切の權威を信順しないといふ特色を呈して今日に至つたのである。そこでそれが自由主義といふ美名の下に、盲目的な個人突進、破壞的な秩序打破となつて現はれるのは、悲むべき事ではあるが、已むを得ない現象。但し自由主義、個人主義、現實主義、此等も決して此のまゝで濟むものでない。十九世紀から廿世紀への轉機には、その將來の轉機が已に見えつゝあるのであるから、日本もその

解釋に仲間入りをし、又は一つ光明と生命とを新に供給する役目をするや、否や、茲に吾々の問題と責任とがあゝ。今の時は決して單に外國思想を畏怖すべき時でない。

將來の事は暫く別として、兎に角、日本の內部に蔓つて居る反抗思想と、西洋近來の反抗思想と、二つが此の如くに相合して舊來の固定した權威、權威の濫用に反抗する。それに逆つて元來の保守思想、形式主義が尙ほ强く日本に殘つて居る。茲に逆潮の渦卷きが起りつゝあるのが、即ちこゝ二三年來の社會現象である。今日、思想界の先達又は敎育の柄を握つて居る人々は、自分等には十分自覺して居ないであらうが、存外强く幕府時代の階級思想に束縛せられて居る。藩閥とか學閥とか云ひ、又は官僚臭味とか規律拘泥とかいふものは、その現はれる方面を異にして居るが、要するに權威を一階級で獨占して行かうといふ階級思想が　事情に應じて發表するものに外ならぬ。

特に道德思想の事を命令で支配し、學校教育の大事を官規で行ひ得るといふ考への如きは、その甚しきものであつて、人間の人格が如何なる位置と力とを有するもので、思想や教育の事は、人格の力でなくば支配出來ないといふ根本の消息を無視して、茲に慈愛のない權威となり、獨占の權威を濫用するに至つたのである。教育界が宗教を嫌忌するのは、表面は宗派心や迷信の畏るべき事を理由として居るが、その奥底に入れば、宗教の信念が人格の力に現はれて、威武にも屈しないものを生ずるのを恐れるためであつて、自信のあるもの、主張ある人が教育界の窒息する様な空氣の中には留まり得ない様になるのも、此のためである。教育勅語一つにしても、その精神を解釋し、その理想的方面を宣揚するものがあれば、私解は不敬だといふ様な評を加へ、而して只規則的法律的にその條項を教へ込まうとする如きも、やはり此と同様の階級精神、形式主義から出た弊である。俄に思ひ出した様に祖先崇拜だ、

神社崇敬だと唱へ出しても、その崇拜の主義精神は、漠として過去の功德位の説明で滿足し、人をもその形式の中で滿足させうとするのは、德川時代の權現様崇敬よりも一層貧弱な形式主義でないか。

此の様な階級思想、即ち權威を一階級に握つて、その命令に人の服從を強ひる氣風は、實際の家族生活にも多く殘つて居、親と子、兄と弟などの間に、往々情愛のなく信實のないための衝突を生ずるのは、日に月に多くなつて居る。親や親戚が子弟の結婚問題に壓迫干渉を加へて、そのために子の反抗(甚しきはそのために親を殺したものも出來て居る)を生じ、又は夫婦の心中情死となり、又は悲むべき離婚の數々を出して居る事、今の世に幾何あるか、殆ど毎日の新開にその不幸を傳へて居る。而して惡世の特徴には、この强威の壓迫には又利慾の問題が加はり、戰死軍人の寡婦についた恩給などを奪ふために、その人の節を汚したり、又は汚名をつけた事は、戰爭後頻々として出、

平生は情誼もなく關係もしなかつた親戚が、財産相續の問題に至つては、家族主義の干渉を加へるなど、數へ立てる暇もない。又養子制度のために、不自然な親子の形式を强ひて作り、情愛をも何をもその形式の犧牲にし、人の人格を沒却する事も、やはり德川時代の餘風が尙强いためである。此等の家族關係から出る不幸が、いつでも箇人の權利と衝突するのを見て、罪を今の民法に歸する人が、此頃法學者の間にも大分出て居るが、彼等は今日の民法より少い程度に個人の權利を認める樣にすれば、此等の不幸を除き得ると思つて居るのであらう。然し此れ位でも個人の權利を認めなければ、階級的壓迫、親長者の無法な權威の濫用をどうして防ぎ得るか。彼等の所謂る家族主義風に、民法が家長の權を多く認める樣になれば、慈愛のない權威、利慾を背景とした權威の濫用がどれだけ暴威を逞うしやうか。考へても恐ろしい位である。法律の保護があつてすら、婦人の財産や、結婚離婚の決定など、殆ど壓

迫の下に泣いて居る今日に、その保護を撤去したら、結果はどうなるか。我輩は多少此等の研究に資する材料を集めて居るが、保守論者が家族主義の復興なとと唱へて、慈愛のない權威の横暴に味方するのも、要するに前代の階級思想から出た事で、政治界の官僚主義、教育界の形式主義と相關聯して居る現象である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の序でに祖先崇拜と神社崇敬とについて、尙ほ一言しやう。祖先を崇拜するのは、人が各々自分の親を尊重し追慕する心を延ばして、自分の生命の依つて出て來た源を慕ふ心から出、人情の美はしさは此に流露する。然しながら今日の如くに、一方には科學萬能で、人間の信念を排斥し、靈界に對する信仰を迷信だと貶する教育の範圍で、此の自然の人情をどうして衷心からの力として養ひ得るか。古の祖先崇拜や、今日支那人の祖先崇拜は、祖先の靈が

宗教と教育

尙ほ實在し活動して、その子孫を保護して福を下し、又は怒つては祟りをするといふ信仰で行はれて居る。此の如きは利益打算から出た迷信であるが、而かもそれが人心を支配する力に至つては、今日教育者の唱へる如きぬけ殼の形式祖先崇拜に勝る事數等である。單に現實主義の方面として祖先崇拜を奬勵し、而して他方では靈界の信仰を打破しやうとすれば、その奬說する祖先崇拜が一片の形式に終り、その教へは一種の壓迫たるに終るのは自然の勢である。神社崇敬も亦同樣であつて、神社は國家の功臣を祭つた場處であるから、國家を思ふ者はそれを崇敬せよといつたとて、第一數多い神社の性質が多くは極めて曖昧である事は明白であり、それと共に教育者自身に眞に崇敬の誠もなく、信念の內容もなくて、俄に思ひ立つた樣に、兒童を引き連れて、村の鎭守に參詣したとて何の感化を及ぼし得るか。その上に、今日、神社の多數は、名は官國幣といつても、それは時々の祭祀の時だけの官國幣であり、宮司の任命は官で司さどつても、その維持や司祭の糊口の道は、みな私幣で出來、而して私幣を供へるものは、大多數は我利我利の御祈禱や迷信で出來あがつて居るもの。さもないものは、神々しい森のなかに古ぼけた社殿があつて、年に一二回の祭りをするといふだけのもの。教へもなければ信念もない神社に對して、俄思ひ附きの崇拜を强ふるに先だつて、先づその性質を明らかにし、またそれに對する信仰の內容を與へなければ、何の力にもならない。此のことはこの一年來の各地小學校の經驗に照らして明々白々である。

祖先崇拜にしても、神社崇敬にしても、その內容を明かにし、その信念を力ある樣にしやうとすれば、勢ひ靈界の信仰に入らなければならぬ、宗教的信念の力に待たなければならぬ。內容信念がこゝまで進めば、祖先崇拜は、數代前までの祖先の墳墓だけに限らず、終には一切の生靈、三界萬靈との精

神交通、回向供養の觀念に入らなければならず、又その祖先といふのも、單に肉體だけでなく、精神的感化の祖先にも及び、『佛滅後、月支、漢土、日本乃至一閻浮提に出現ましませる聖賢は、盡く釋迦如來の分身と思召せ』といふ樣な點に進んで、包括と共に統一を要求する樣になるに違ひない。神社崇敬も亦同樣で、一々の功臣祖神を、一々特別の神社で崇敬するから進んで、日本國其者を一體として、その功臣祖神の德を思ひ、又その靈の實在を信ずる樣にならなければ、感化の實力は生じない。信念が此に至れば、則ち國體の大義、國民の天職についての信念となり、又從つて單に過去の功臣を追慕するだけでなく、國民理想の將來に對する信とならなければならぬ。肇國宏遠、樹德深厚の勅語を誦讀しながら、その德の何たるをも考へず、忠孝の德目を唱へながら、古今不謬、內外不悖の大道に對する信念もなく、却てそれ等の信念を排斥する樣な今の教育界に、神社崇敬の眞意義を求めるのは、實に木

不誠實の德育方法

時代の變調と狼狽

濫用と反抗　（203）

の上に魚を求めると同しである。（此の點は、尙ほ『南北朝問題と國體の大義』の末段に說いておいた。）何れにしても、俄思ひ附きの祖先崇拜、神社崇敬は德川時代に形式主義の橫行した跡を、形式の上に復活させうとするもの、自ら權威の大體を思はずに居て、近代の權威を無視する傾向に驚き、氣が顚倒して、自らの權威をこの形式勵行に濫用しやうとした者である。源なき流れは絕え、根なき草は枯れる。但しこの根なし草にも、壓迫時代の形式主義を承け繼いで、その權威濫用を襲用しやうといふだけの根はある。そこでその勢力は、また〳〵近代思想の權威を無視する傾向と衝突して、紛擾と齟齬との不幸を生ずる力だけはある。此が實に恐るべき點であつて、此がために、事前の理に基いた眞權威の發揚を妨害するに至つては、捨てゝおく事は出來ない。

此の如く覿て來れば、今の世に權威の思想が衰へ、之を尊重する念が段々

薄くなるといふのは、自然の成り行きとも云ふべきである。然しその自然の成り行きたるや、そのまゝに放任すれば、落ちる石の勢が行き過ぎて、一切の秩序も何も破壞しなければ止まぬといふまでも行き得る。且つや權威を尊重するのは人生の大本であつて、人がその至誠を盡せば、自らその中から湧いて出る思想であるのに、その濫用からして反抗が生じ、反抗から破壞となり、而して之を救はうといふ者が只形式に拘泥して、逆潮の渦卷を生じたのであるから、救治はこの兩面から着手しなければならぬ。

今日世に流行して居る權威無視の思想は、直接に政治上無政府主義の如く極端に又顯著なものゝみでなく、道德上の功利主義（彼の報德敎の如きも今日は實に此の方になつて居る）や、文藝上の自然主義や、又は實生活の現實主義（奮鬪とか成功などいふ本尊も皆此に屬する）、皆同系統の思想であり、保守的反動から出た崇古も、その唱へる所は正反對の樣でも、眞個大道に對する

破壞思想と保守思想

信念理想のない形式方便としては、やはり同じ流れに屬するといつて差支ない。世間の人は、破壞や無政府主義のみに權威無視の現はれを見て驚いて居るが、此の如きは表面の泡沫のみを見て、水底の渦卷を見ないものである。親に反抗する兒、師を輕んずる弟子、君に敵する不臣、此等は皆勿論權威を無視する者に相違ないが、而かも親が親權を濫用し、敎育者が弟子の人格を無視し、爲政者が官僚の都合のみを慮るのは、已にこれが正當に權威を重じないから出る權威濫用、即ち權威の汚辱である。親でも長者でも、自分の權威を自覺すれば、それが自分の私有でないといふ事を能く領解しなければ、眞の權威は生じない。師長が子弟を敎導する力は、彼れが萬古の大道、遍通の眞理を代表するから生ずる權威にあるので、此の權威を執行するには、自分自らが、又久遠の權威に對して敬虔の信順がなくてならぬ。此の誠意があれば、又この大事の後繼者たる子弟の人格を尊重して、その人格の力でこの

權を承け繼がしめる覺悟と誠實心があるべきである。君主又は爲政者の心も、此と同じであつて、この信順の誠がなくば、眞の權威は決して成立しない。之を日本の君道に照らして見ても、神武天皇は、建國の始めに、暉を重ね、正しきを養はれた祖宗の道を奉ずるの意を明かにし賜ひ、崇神天皇は、天下に光臨するは、一人のためでなく、人神を司收するためである事を常々御宣言なつて居る。此れ實に祖宗の大道に對する執誠なる御信念の結果でないか。此の信順信仰あつてこそ、權威は正當の權威になり、そを宣明せられる人格の力で始めて人を感化し得るのである。誠に善き子たる者でなくば、眞の親たる資格はなく、信順の誠ある弟子でなくば、感化力ある師になり得る譯はない。靈界の信仰を拒絶しつゝ祖先崇拜を唱へたり、千古に通ずべき道の信念もなくて、神社崇敬を奬勵したところで、それで權威が出來る筈はない。今の世に權威を無視する者は、勿論責めなければならぬが、その無視の

原因を作り出した權威濫用を、そのまゝに用ひて、形式の權威を立て、之を己に獨占しやうとする者の如きは、一層責むべき權威の罪人である。

畢竟、權威を濫用する者と、之を無視する者と、共に眞の權威の賊たるに至つては一つである。彼れは根なし草、此は親なし子、己れの根本を忘れるに至つては同じである。之に反して大道に基く權威の執行と、權威に信順する心とは一つであつて、此の心を得た人格でこそ、誠に權威ある者として敎へ、治め、又命令し得る。而して此の如き權威には必ず慈愛と信仰とが伴つて居、而してその發揚は即ち個人信仰の發揮となり、人格の完全となつて現はれる。

七　日本の思想界

東西の混和

日本の文明は、日本元來の社會組織を中心にして、四千年以來の印度支那の思想を吸收し、今又維新の開國と共に、西洋三千年來の文明や思想を取入れつゝある。此の複雜な配合ある爲めに、色々の難問も生じて來るが、多望の將來もこの中から生じ、大切な天職が此處は横つてゐる。現在の思想界には、此等古今東西の思想が、一つになつて來てゐるから、現在を知る爲めには、先づ其の淵源を探つて見なければならぬ。

神儒佛

外篇の日本宗教史で述べやうが、日本人の思想は、今まで神儒佛三道で養ひ來つた。神道は骨格の如く、儒教は皮と肉との如く、佛教は血液の如く、三つ相合して、吾々の精神上の遺傳を造り上げてゐる。

神道思想

極めて概括して云へば、神道の特色は、日本の社會組織と離すべからざる處にあり、其の信仰の內容を云へば、元は靈魂崇拜から出て、今日はそれが祖先崇拜と英雄崇拜として殘つてゐる。元來日本國民の成立ちは、色々の種族が割據して、各々其の祖神若くは英雄を守護神と仰いで居つたのが、其の中でも殊に威德の傑れた日神を祖神とする天孫民族に統一せられて、國家は鞏固な組立を得、其の統一が國家の骨組になつて居る。而してこの國家の祖神である日神が、光明と秩序と溫育との德を代表せられた如く、國民の理想は、常にこの三德を中心として來た。光明の精神は、快濶の氣象となり、總べて眞善美なるものを取り入れる文明を造り出して居る。秩序を重んずる德は、即ち權威を尊重する精神であつて、國家の統一、道德の秩序、皆この德から湧き出で、この秩序を破るものに對しては、征服の武德となつて現はれる。天照大神が素戔雄尊の暴戾を制御せられた如き、又は神武天皇が、日を

光明と秩序と溫育

背に負ふて土蠻を征服せらた如き、皆この武德の發表である。然しながら、この武德は權威と共に慈愛を兼ね備へて、萬の物を育てあげる生々の德となる。日本が總ての文明を容れて、之を同化して行くのは、即ちこの德の發表である。これ等の理想と、統一ある社會組織とは、常に相結んで、今までの日本の歷史を造り上げて來た。これは即ち殊に神道と云ふよりも、日本國民の根本性格であつて、又同時に大理想である。この信仰が一般人民の精神を感化する上に於ては、一方には、この統一ある國家、幷にそれを造り上げてゐる家族の祖先を追慕し、その德を仰ぐ祖先崇拜となり、それと同時に、總べて高尙なるもの、偉大なるものを崇拜する英雄崇拜となつてゐる。

祖先崇拜と英雄崇拜

此等は日本固有の思想に就て、其の特長とする所であるが、それと共に短所と云ふべきは、種族割據の遺風である。諸ての種族は段々に國家の統一に吸收せられて來たが、而かも割據の氣風は、時に依り事情に應じて發表してゐる。平安王朝の制御力が衰へた後には、源平の種族爭ひとなり、足利の亂世、德川の封建を經て、今日に至るまで、其の勢力は中々强い。今日に於ては、種族割據でなしに、地方的感情となつて殘つて居るが、其の感情には鎖國的氣風が伴つて、此の國の進運に對する開濶雄大な氣象に多少の妨害を與へてゐる。例へば、敵愾心の如きは、國を守る上に於ての美德には違ひないが、其の心が往々にして排外の精神となり、徒に外國に對して憤懣するやうな事も少くない。此くの如きは、日神の偉德たる光明の理想に反くものであるが、國家の統一が出來る前から存し、又王道の衰へた足利德川時代に養成したこの氣風は、今日尙人心を支配して、殊に神道家と稱する特別の人々の間に盛んである。

種族的氣風

元來の日本思想のみで居て、文明の開發が十分でない處へ入つて來たのは支那思想である。支那思想は、その元は牧畜民族の間に發達した家長制度に

基き、その道德は家長に對する孝德から出て居、天地の秩序整然に對する畏敬の念が之に加はり、君王をこの天命の代表者と認めて、その政治法制が出來て居る。それ故その宗教は、一般の鬼神、特に祖先の靈と天とに對する信仰儀禮であり、その宗教は社會的道義と密着して居る。それが即ち儒教である。儒教が日本人に影響を及ぼしたのは、第一には文物と法制との輸入により、それに思想信仰が附いて來ては居るが、哲學とか信仰といふ方よりも、多く社會的道德 Civic morality の側にある。聖德太子の憲法には、君臣の關係、禮儀、官職、信義、賞罰、公義、衆議などの教訓として現はれ、大化以下の諸法令には、政治の組織や法制の上で、公德の教として現はれ、王朝を通じて、明法と明經とは、共に政治上の根本思想、上流の修德方法として、日本人を教化したのは、儒教であつた。

社會的道德

法制の整理

此等の教は、一方で在來の日本社會には尙ほ甚だ不完全であつた法制を整へて、社會の秩序文物に至大の助けを與へ、又その家長制度の道德は、元來の種族的宗教に明瞭な組織的概念を與へた。例へば忠孝の德は、元から日本人の間に存在して居たが、その概念を明かにすると共に、二者の結合に說明を與へた如き、又は純朴な信仰と事實の服從とで出來上つて居た君臣の關係を、大義名分として理會せしめた如きは、儒教の力である。此等の社會的道德と、天理人道についての哲學思想とが結合して、日本の思想に感化を及ぼしたのは、足利時代に宋學を輸入して後のことであるが、この感化は德川時代の國家教育（特に士分の）に依つて、一層深く力を得、又その刺激で、朱子學、陽明學、古學などの思想家をも生むに至つたが、その感化はやはり社會的といふ方面を主にして、修身齊家の教へ、治國平天下の材料として用ひられた。但しこの修身齊家の教へには、禮儀道德の感化に加へて、克己修養の德が偉大な感化を與へ、士風の陶冶に重要の力となつた。それ故に、前後

大義名分

を通じて儒教の感化は、社會的公德の方に多く、個人の感情生活を支配する力は薄く、從つてその教へは義理（即ち社會の道德的秩序）といふ方に傾いて、その末になつては禮儀作法など形式的の方面に發達し過ぎて、人情の自然を壓抑する樣になつた。

儒教の長短

「至誠天理に率つて人道を行ひ、己れに克つて公義に殉ずる風は、儒教感化の特色であるが、それは上流士人の間にのみ行はれ、それも場合に依つては形式に流れ、一般人民の感化は、寧ろその傾分以外として閑却せられた。」此が先にも述べた義理と人情との衝突を來す原因にもなり、又上流治者と一般被治者との間に疎隔をも來した。「儒教の永遠な生命は、天理を敬ひ人道を盡す點にあるが、今日の日本には、法制政治に對する儒教の力は甚しく衰へ、公德養成の力としては、尙ほ教育社會に勢力を占めて居るが、それが往々にして根本の天道に對する信仰を離れて居るから、現實主義實證主義の方便道

現代と儒教

佛教の感化

德となり、形式に拘泥する風は、德川時代と大差はない。儒教が今まで日本に與へた感化は、主として社會道德の方面にあり、又その倫理思想が、忠孝、信義、禮儀、謙讓などの德目を明にした功績は沒すべからざるものがある。然しそれ等が依つて出て來た源泉である天道の信仰は、現代の思想と離れ、又その發生した土臺である家長制度は、今後の社會に實力となり得ないから、此等の教が終に形式に走るは已むを得ない事情である。特に儒教の道德は總て上下の關係のみで成り立ち、對等關係の教訓が缺け、人格の尊嚴を認めない傾きが多いから（特別な修養は別として）、その今日に留保し得た勢力は、勢ひ保守思想として、所謂る現代思想に對する當の敵となる。所謂る新舊思想の衝突といふものには、儒教主義と極端な自然主義との背反が最も著しい現象となつて居る。

佛教の感化に至つては、實に多方面であつて、概括しにくいが、約して云

人生の諦觀と三寶

宗教と教育

へば、「日本人の形而上的思想と感情生活との上に大勢力を及ぼした。」佛教の力は、その教祖の人生に對する悲觀と、無我の修養とに依つて此の悲觀を超絶した人生の諦觀(即ち善い意味でのあきらめ)にある。この諦觀の內容は、人情の深みに入つて、萬化の融合を味ふにある。佛陀とは此の諦觀を體達し得た人格の標本師主、法といふのはこの諦觀の內容、即ち萬化の融合を明かにする教へ、僧といふのはこの諦觀を目的として同一の師を奉ずる人類の精神的團結。それ故に聖德太子はその憲法の初に於て、和の德を說き、次章にはこの佛法僧の三寶は萬化の極宗、四生の終歸、即ち一切生類の理想歸着だと敎へられた。此の諦觀の感化は先づ、功德回向の實行として現はれて、人々は皆同一靈界に生存して精神に於て相融合し、その修める功德は互に融通し得るといふ信仰を與へた。此の功德廻向の實行は、早く已に聖德太子薨後、その夫人の發願造像に現はれ、それから以後博く弘く人心に浸潤して、今日

功德回向と同情

因果の諦觀

でも國中到る所に「三界萬靈供養塔」といふ如きものを見る。この回向の觀念は、又冥福の祈願になり、祖先崇拜をその中に收めたのみならず、又一切人類と生存に共にするといふ理想となつた。此の萬化融合の信仰は、獨り人類に限らず、萬物皆眞理佛智の開顯發揚として、精神上我々と同一の仲間であるといふ信仰にもなり、我々の祖先、特に王朝から足利時代にかけての日本人に、天然に對する濃かな同情を起さしめたのは、最も注目すべきことであつて、此は日本の文學や美術を領解する上に缺くべからざる要契である。尙一つ、佛教の教へが日本の人心を感化した重大な點は、因果の諦觀にあつて、天地人生何事も因果の必然に支配せられて居、特に人生の運命は、皆過去宿業の結果に外ならぬとするから、人をして利害得喪に心驚かず、靜かに人生の禍福に對せしめる力を與へた。此の點が特に「あきらめ」と稱する日本人に特別な諦觀氣風を養つた原因であつて、それには餘りに人心を和らかくする弊も

あるが、又この諦觀が人心に平靜と安慰とを與へた功は、決して忘れてならぬ。佛教の感化は――特に平安朝には――人を感情的にし過ぎた點もあるが、兎に角、日本人の精神に深さと溫味とを與へた點は最も著しい。

概括して見れば、佛教の感化は此の如きもので、此等の點では始終一貫して來たが、又その長い歷史の間には種々の宗派が各々その特色のある教を布き、その間に利害長短種々の感化を及ぼした。その中で先づ考ふべきは眞言宗の感化である。眞言の本義である四曼三密の教、幷に弘法大師の十住心には深遠雄大の世界觀はあるが、その實際に與へた感化は、萬化融合の觀念を事々物々に宛てはめて、之を人生現實の差別相に適用したにある。その適用が餘りに便利に、融通が利き過ぎたために、平安朝の眞言佛教は、終に現世の利益を祈禱する物質主義の宗教となり、思想信仰に確乎一貫の中軸を缺く樣になり、其の理論の如何に拘らず、實際には諸佛諸天多神の崇拜となつてしまつた。勿論この融通の利く教理があつたために、日本の神々をも兩部の一面に攝し得て、兩部神道を作り出したが、そのためにけじめのつかぬ融合に終り、その混淆思想は、道德に及んで、義理名分を混淆して、社會の綱紀を廢弛するに至つた。平安王朝の末路、藤氏の專擅、院政の變態は、その一部の責任、實に眞言佛教にある。人の精神を寬濶にし、事相修法の難有味に人を醉はしめ、建築や繪畫彫刻に至大の影響を與へた功はあるが、此がために道德思想を侵害し、又信仰に貫徹した主義を與へ得なかつた弱點は、決して忘れてならぬ。その餘弊は、日本古來の迷信と相合して、今日も尙幾多の迷信と結び附いて居るのは、實に眞言の影響である。

平安末路の亂世に當つて人心に安慰を與へ、それから以後、多數一般の人民に安立を與へたのは、淨土の一門である。この教の祖法然上人の人格は、實に勅諡號の圓光明照の通りであつて、實に彼岸淨土の淨光、大悲救世の佛

力をこの人界に代表する如き人であつた。又その教へは、人間一切の我執を捨てて、大悲攝取の光明に身を托するにあり、この點に於ては紛々たる利害の人生を超絶して、寂靜常樂の理想に憬がれしめる力はある。

月影のいたらぬ里はなけれども
眺むる人の心にぞすむ

の一詠は、實にこの超絶安心の妙趣を傳へて、人の心を彼岸理想の寂光に遊ばしめる。然しながら、一切人事の紛擾を打ち切り、一切の思慮分別を棄てはて丶、偏に如來他力の救濟に委せるといふ、一向專念の信仰は、往々にして理智を無視し、意志を弱らせ、且つこの絶對の信仰裏には人生一切の事を顧みない樣にさせる弊を生じて來た。特に眞宗に至つて、純他力の信仰を唱へるに至つては、人格の力を沒し、善惡正邪の分別を弛めて、只管信仰の一路に向はしめる。その上、この信仰を現在人間の活如來たる法主に對して注

一向專念の偏頗

ぐに至つては、本山宗門あるを知つて社會や國家あるを忘れしめるに至つた。戰國の亂世に乘じて、一向門徒の徒が兵戈を擁し、宗門を一獨立國の如くにしたのも、必しも偶然でない。特にこの一向的氣風は、石山開城の反對者となつた東本願寺一派に著しく遺傳して、その信仰の熱烈なだけ、それだけ、他事に盲目となる風を馴致して來た。異端として斥けられては居るが、祕事法門といふ一派の如きは、人生を無視して信仰のみを鍛へやうとする極端を示して居る。淨土門の超脫觀は人生に必要な一方の安心であつて、慈悲の救濟に身を托するのは、宗教の心髓であるが、その極、平等に馳せて差別を忘れる風ある一事は、思想の上で最も警戒すべきこと。　この極端の信仰主義が、近頃虛無主義の一端と結びつきかけて居るのは、特に注意を要する現象である。

次に鎌倉以後足利時代に亘つて、最も力を呈したのは、禪宗の感化と、そ

れに伴つて來た道教思想である。禪と道教とは共に自然主義(眞の意味で)の魁であり、印度の禪定氣風と老莊の達觀恬淡とが、支那(特にその中部)で相合體して、鎌倉時代から足利時代にかけて、深い感化を及ぼした。禪の精神は、一言して盡せば脫俗である。思慮分別や利害得喪など、あらゆる人生の葛藤を打破して、我が心の奥の奥に潛んだ不動の精神、所謂る本地の風光、本來の面目に接するにある。此の氣風と修養とは、特に意志の鍛練として武士を感化教化し、その結果、武術や作法を盡く意志發揮の第一義に接觸して、此等を總て道として修練せしめ、武士道の一半は茲に出來上つた。此の方面に於ては、禪は力のある教へ、精神根本の修養である。而して此の修養は、天然や人事に對しては、差別相を超絶した平等の靜觀となり、その心を以て天地に對すれば光風霽月の天然を觀じ、その結果は詩となり、墨繪山水畫となり、茶道となり、風雅の道ともなつた。道教は、元來その修養に於て意志の方面を缺

いて居るが、天然靜觀、人事超脫の方では、禪と提携し、特に支那の詩的風趣に於て禪に感化を及ぼし、この方面で日本に重大な影響を及ぼして居る。禪と道との自然主義は、武士道と日本趣味との上で、日本精神に深い印象を與へ、今日になつても、此の方の風味は、日本人の精神氣風に大切の遺傳を殘して居るが、自然主義には個人主義が伴つて、その弊は、意志の方面で我意本位の野狐禪となり、感情の上では、獨善無爲の氣風、即ち茶人好みにもなつて、道德の大綱、社會の風紀に嘆かはしい感化を及ぼした。足利時代に於ける下剋上の亂態も、一部はこの個人主義の責任に歸する。禪と道教との感化で、尊重すべきものは、十分に之を重んじなければならぬが、その病弊に至つては、嚴に監視すべきものである。國家の統一が確であり、一般の風紀が健全である限りは、この病弊は甚しく現はれないが、一旦その大綱の弛むだ時には、如何に爆發するか、最も恐るべきものがある。

西洋思想

今までの日本を作り上げた精神的感化は此の如きものであるが、それに加はつて來たものは、即ち西洋思想である。此には自ら二方面あつて、一つはギリシヤとロマとの思想を宗教の信仰に總合して來たキリスト教の思想と、一つは近世文明の社會的變遷から生じて來た新思潮即ち現代思想である。

キリスト教の信仰

キリスト教の信仰は、一に天地の支配者、萬人の父なる神に對して、子としての孝を盡すに歸着し、而して人生はこの萬能慈愛の父が之を支配する以上、必や萬人共に同胞の實を擧げる樂天地、天國が來るといふ望みに活きるにある。而してこの信仰の標本となり、此の望みの保證人になつたのは、キリストの人格にあり、キリスト自らの天父に對する信仰、又自ら身を殺して同胞の爲めに罪を消し、肉體を亡ぼして靈を活かした實證は、人間たる我々の、皆仰で師とし宗とすべき所である。キリスト教二千年の歴史は、天父とキリストと天國と、三つの觀念を廻轉して、そのどれかが各々の時や人に應じて、重要の中軸となつて現はれたが、何れにしても、一方は人類同胞の實を信仰の融合に擧げ、一方は人各々がその人格を進めて理想の神人に倣ふといふ教への發展である。キリストは、この信仰の中軸として宣して云つて居る、『父の我を愛し給へる如く、我も亦汝等を愛せり、汝等我が愛に止まれ』。パウロは云つて居る、『體は一つ、……靈は一つ、……一切の上にいまし、一切を貫き、一切の中に住み給へる神又父は一のみ。』此の一切融和と天父中軸との思想は、慈愛傳道の實行となり、キリストを中心とする信仰は、人格の完全な發達、『天の父の完きが如く完かれ』といふ一事に至大の力を現はして、種々の人物をその中から生み出した。萬有融和の信仰は、佛教にも元來備はつて居るが、人格中心の思想と、それから生ずる道德とは、在來日本の最大弱點であることを思へば、日本が今日並に今後、キリスト教から受けるべき

人格の完成

感化の、那邊にあるかは、云ふまでもなく明白であると思ふ。

然しながらキリスト教思想が現在日本を影響しつゝあるのは、新教主義(Protestantism)の個人的方面にあり、特に近世の西洋文明と結びついて來て居るから、此の點に於ては、愼重の考慮注意を要する。何となれば新教主義は、先にも述べた如く、「中世紀の教會に反抗して起つたために、その個人主義には、權威といひ傳承といひ、總て確立したものに反抗する氣風が多く。」革新性はあるが、繼續性の觀念に乏しい。從つて人格の完成といふことについても、融和といふよりは特立の方面を重んじて、包容攝受の精神に遠かる。「進む先は思ふが、源を思はず、その極端になつては、人々各自を萬事の標準にして、協和の精神を失ふ。勿論近年には、新教信者の中にも、大分新教主義の弊を認め始めはしたが、ハルナックの『キリスト教の本性』に現はれた如き、キリストと直談判的の氣象があつて、その爲めに Integrity の雄大なるも

のがない。此は新教主義の長所であるが、又實に短所であつて、此の點では、フランス革命や工業革新に依つて馴致して來た近代文明の個人主義、現實主義に緣が近く、西洋諸國の文明はこのために難關に遭遇しつゝある。（此は、外篇『西洋文明の由來』に述べる）。此の風潮は、近世社會で經濟組織の變遷に伴ひ、又科學萬能の迷夢にも養成せられて、人情の深い味、團結協和の感化、權威悅服の美德と反對の方面に走つて、退いては歷史傳承に甘んずることも出來ず、進んでは新精神のある融和團結の實現を期することも出來ず、思想界、道德、教育、信仰、皆岐路に迷ひ、cross road に立ち、玆に現代の煩悶となつて居る。一方個人主義の風潮は益す强くなつて、國家のみならず、家族の團結に對しては危害を及ぼしつゝあるのみならず、經濟生活の困難は、人をして精神上の餘裕なく、只管現實に齷齪せしめるから、個人自らも輕薄な現實主義に、已むを得ず滿足するか、又は不平怨嗟のまゝに沈默せしむる狀態

にある。そこでこの個人私利の要求は、又形を變して、資本家や勞働者など、階級の爭ひ、所謂るKlassenkampfにもなれば、又國際の激爭を生じ、それに加へて進化論の生中（なまなか）な應用で、人生只競爭排擠あるのみと思はしめるまでに立ち至つて居る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

新舊思想の混亂衝突

そこで日本現在の思想界を見ると、今までに傳來した思想と新來の難問とが、一時に相當り相激しつゝある。此については、概見の章と權威の章とに少し述べておいたが、一言にして盡せば、新舊思想の衝突であつて、その中には、繼續性と革新性、統一と獨立、國家と個人、理想と現實など、今までその關係を觀察して來た對照が相ぶつゝかり、宗教と教育との杆格といふことも、その一部分となつて現はれ、又宗教の中でも新舊の衝突、教育の方でも精神と形式との衝突など、一時にこゝに集まつて來た。神社崇敬の訓令を

奉じ、生徒を引きつれて神社に參詣した教員は、その祭神の何たるを答へ得ず、又その人が家に歸れば、自然主義の小說を耽讀するなどの奇觀も、この渦動の一部。毎日會社の帳簿をひねくりつゝ、何かうまい成功の路もないかと夢路をたどる人が、日曜には碧巖の講釋を聞いて、しびりを切らせたり、祖先崇拜を奬說し、家族主義を皷吹する人が、生存競爭の眞理を話しては、親が子を愛するのも、つまりは自利ののためだと說くなども、亦同樣の現象である。その他擧げて來れば數限なくあるが、その爭ひは、要するに先に第二章乃至第五章に擧げて來た、諸の對照について、圓滿の調和を得ず、各々その一方に割據する人が皆在來の思想や近代の思想の中から、己れの考へ又は利害に都合のよいものを執つて來て、之を武器とするに依る。便宜のために此等の分子を抽象して表にして見れば左の如くならう

此等の主義傾向には、各々長短善惡兩方の分子があつて、今日では、それ等が雜多になつて混戰して居る。例へば、現實主義といつても、眞に現世の實相を重んじて、科學の研究に重きを置くもあり、又現實の道德に重きを置くもあるが、又同時に浮世一分五厘風の輕薄な氣風、成功を夢み實利のみを追ふ風も、共にその中にある。歷史を重んずる傾向には、國家成立の大本を尊重して、國民傳來の權威を中心にするもあるが、又徒に形式に拘泥して、只管保守を事とし、現代を理會しない頑迷の氣風もその中に含まれてある。

克己主義には、修養の大切なことを知つて、能く心を練り、身を修めるもあるが、又形式表面の作法で自らをも人をも束縛しやうとするもある。個人主義には、個人の放埒を標目として進むもあれば、又天才の尊嚴を鼓吹するもあり、直覺主義の中には、禪の修練や倫理上の直覺說もあるが、又人生を愚にした樣な獨善の氣風もあつて、山林生活などを唱へる。勿論、此等の異主義、異傾向は、何れの世にも存在しないことはないが、今の日本には、それ等の混戰が最も激しく、而してその渦動の中には　東洋四千年來の思想と、西洋三千年來の問題とが、各々その勢力を振つて居る。此の間に處しては、教育に從事する者も、宗教を傳へるものも、能く差別と平等と、現實と理想との關係を領得して、遠大の理想と綿密の思慮とで、問題を解決するに勉めなければならぬ。此の如き重大の時に際して、教育と宗教と各々割據して、その領分に立てこもり、互に反目する如きは、何たる陋態であるか。

八　現代文明と宗教並に教育の缺陷

現代の日本文明は複雜な難關に遭遇して居る。困難もこゝにあるが多望も此の中にあり、宗教の弱點も教育の缺陷も此から生じて居る。この難關に立ちながら、國民教化の重要勢力たる教育者と宗教家とが、互に理會せず、同情せず、互に他の缺點のみを見て、反目嫉視するとは、何たる不幸ぞ。

難關と希望

宗教と近世思想との杵格

宗教の心髄は、理想的の見方から得來る安心と、信仰で養ふ精神的融合の生活にある。然るに現代の文明は、現實に拘泥するために物事に對する理想の見方を缺き、實利を重んじ主我に偏する所からして、人情の深みを味ふ力が甚しく衰へて居る。現實と主我とは、現代文明の病根であるが、此は一つは中世紀文明が餘りに信仰の統一を重じ、その思想が事前の理にのみ馳せた

に對する反動であり、又一つはこの反動の中から出て來た革命思想の結果である。言葉を換へて云へば、中世思想は統一と繼續とに偏し、從つて理想一本槍となつたに對して、近世文明は獨立と革新を主張し、事實現實一天張りになつた。先に二、三、四章に段々述べた通り、此の如き二つの反對分子は、此の如くに分離し又背反すべきものでなくて、人生の圓滿な進行は、實に二方面の調攝融和にある。然るに近世文明は、今までの定說主義に反抗してその反對の極端に走り、宗教改革には個人的信仰を鼓吹し、フランス革命には現實界での自由を要求し、工業革命の結果、實利の外に人生の力はないものの如く見られる樣になり、そこへダーキンの進化論を實際に又早計に應用して、人生の競爭といふ方面のみに着目する樣になつた。

此等の思想は十九世紀の半頃で、その極端の頂上に上りつめ、その後半から今日まで、段々に理想主義、統一思想を表はして來たが、その勢力はまだ

微弱であり、新時代の統一ある理想として十分有力なものはまだ出て來ない。例へば、信仰の方面では、キリスト教が個々の信仰主張で極端に分派して來たに對して、實際問題としては教會合併（Church union）又は聯合運動となり、――一八五〇年グラドストーンの東西聯合の企圖を始めとして、今日益々盛になつて居るが、――又信仰實質の方では、所謂る新公教主義 Neo-Catholicism の思想などを生じ、――此は外篇、現代主義の章に述べる、――多少信仰の統一、教會の聯合といふ氣運を高めつゝある。或は又文學の方では、十九世紀後半の寫實風、自然主義が一轉して、新ロマンテクや神祕又は表象風の文學をも生じ、メーテルリングの如き思想家學者も出、イブセンの如き一種の破壞的又懷疑的批評家でも、所謂る第三王國――餘程個人的ではあるが――の理想を高調する。又經濟上の競爭にしても、十九世紀前半の個人競爭に對して、聯合的競爭、即ち資本家のトラストや勞働者の組合など、その競

爭は激烈であるが、聯合的氣運の力は段々に勢を得て來る。今では資本と勞働との對抗として段々大規模に激しく行はれて居るものも、終には尙一層大きな調和に進むしるのでなからうか。轉び出した岩も、終にはどこかに止まらなければなるまい。

兎に角、近世文明の轉機は已に幾分か現はれ初めて居るに拘らず、全體としてはまだ中々問題を解決するに至らず、近世的又は現代的といふことは、現實と主我と新を求めるとに歸着する。所謂る新事物、新思想、新傾向などいふことは、それ自身では決して惡いことでなく、人生は一面からいへば新創造の舞臺であり、社會は革新の力でその生々の活氣を呈する。然し如何なる春の草木といへども、その種は先の秋に結んだものであり、又は土中の根から生へ出るものである。然るに現代思想の新傾向は、中世紀に對する反動の子として、反抗主義に偏し、何事も基く所、依つて出る源あるを思はない

で、盲探りに新を求める。「試みやう、やつて見やう、當つて碎けよ、といふのは、一面から云へば勇氣のある仕事であつて、思想の上で云へばジェームスの所謂る心剛 Tough-minded なプラグマテズムの如きは、その代表者であるが、而かも燈臺の光りが照らして居るのを顧みず、突進して船を岩に乘せ上げる船長は決して賢明な航海者ではない。やつて見やうは、青年の勇氣として美なところはあるが、この青年氣象は成熟の壯年に對する豫備として意味のあるもの、新な鑛山を試掘するのは、畢竟その產鑛を正當に利用するためでないか。「汝の立つ所を深く掘れ、そこには泉が湧かう、又新な泉からは新な水が得られるに違ひない。而かも立つ所の直傍に古い泉があつて、表面の浮草を取り去れば、清水が滾々として出るのを思はないのも愚であれば、又新な泉とても、岩をくゞり土を滲して來る源のあるを考へないのは、畢竟無知の盲目である。源なき泉は涸れ、根なき草は枯れるに違ひない。

現實に眼眩して、その基本にある理想を無視し、主我に囚はれて、人情の融合を思はず、新を追ふて源を忘れる。理想を無視するといふのは、畢竟物事の精神的意義を忘れることであつて、繪畫よりは寫眞の方が眞實だといひ、我れ自らよりも外界の方を確實だとする心であつて、生命を維持するには、胃袋よりも食物の方が大切だといふに等しい。その結果は却て眞の現實に遠ざかつて、現實をも誤解するに至る。例へば美術を味ふ心は、元は生殖慾の變態で、人心の迷ひだとし、親子の愛情も、畢竟利己心に過ぎずと見て、人間世界の道德といふのは、畢竟は動物狀態の進化であるから、道德の標準は動物の獸的生存競爭を維持するにあるといふまで進む。或は又自然主義の文學者で、夫婦とか朋友などいふも、畢竟腐れ緣に過ぎない、夫婦相和するとか朋友相信ずるなどいふは、自然の道でないと主張するもある。此の如くにして現實拘泥は、物事の表面だけ、又は一部分だけを見て、その根底や聯絡を見

現實主義と破壞思想

ないために、終に局部的見解、斷片的思想に陷り、主我の暗中に入つて出路を知らない樣になる。

之を譬へて見れば、大規模の工業を營む場合に、全體を監督する人は、仕事を一つの全體として見るが、局部の勞働を分業して居るものは、その局部の外を思はない樣になると同しである。匆劇の世の中であるから、人は各々自分の仕事をし、當面の問題を處置して、その外に餘裕は少なからうが、その間にも尙ほ、人生の大局に對して、統一あり聯絡ある思想を抱いて行けば當面の現實以上更に大に、更に深い力と意味とが、人生にあるを發見しなければならぬ。此の如き大局の着眼がないから、偏に主我の心を長じ、思想に於ても實行に於ても偏僻となり、他との聯絡を棄て、世に背き人に離れる孤獨の淋しさ、世を怨み、人に憤る憤懣の心も出て來る。個人主義といひ、破壞思想又は虛無主義などいふものは、皆一にこの現實主義の結果であつて、現代文明の黑い花は、此の如き根なし草に咲く。

＊　＊　＊　＊　＊

科學思想

實際の方は暫く措いて、之を科學思想の上に見ても、科學は實驗に基くといふことのみに偏して、科學の科學たる所以は、天然萬有の中に精神的意味を發見するにあるといふ一面は多く閑却せられる。精神的意味といふのは、現實の中に現はれて、而かも現實の上に立ち、人間の理性に寫し取り得る萬有の理法である。科學者には勿論天然の法則といふ考へはあるが、それが即ち現實以上に立つて萬有を支配し、人間の理性と同じ根から出、而して天然の中にその眞實の意味 Inner meaning 即ち精神的意味を發揮するものであるといふことを思はない人が多い。その爲めに科學者の世界觀は機械的になつて、萬有は鐵鎖の如き機械的法則のみで動いて、人間の精神は此に對して單に受け目である外ないことになる。そこで科學者の考へでは、人間の精神は

機械的說明

如何に微妙又雄大の働きをするにしても、人間といふ動物が生理的に進化して來た結果に外ならず、——その外にには何等の意味も根據もなく——而してそれ等の働きは腦髓の賜であり、腦髓は又單に生理上の一機關であり、生理上の作用は皆化學作用で出來、化學作用は歸着する所、物理作用に外ならず、而して物理現象といつても數學的に之を表はし得るから、萬事歸着する所數學的運算の發表となる。此の如くにして世界の萬事、皆數で律し得ないものはなく、數理關係が色々複雜になつて、終に人間の腦髓を作り、心の働きをし、道德も美術も皆此から出るといふ。此の見方は、蒸汽機械を觀察して、その大さや、局部の比例だけでその說明が出來たとし、機關を動かす肝心の熱そのものを忘れるにも似、又植物の生長を研究するに、水と熱と土壤と肥料とのみを觀て、その中心たる種子を棄てゝ置くに似て居る。此の如き機械的世界觀を執る人は、西洋でも十九世紀前半まではあつたのであるが、

日本では二十世紀の今日も尙ほ之を唱へる人があり、その基本に立つて、道德でも何でも皆表面の機械的關係だけとしてしまふ。此等に對して、今一々辯駁するにも足りないことであるが、日本ではまだ之に就いて云々しなければならぬ。此の如き考への人に對しては、先の理想と現實との章を讀んで能く考へてほしいと一言するのみに留めておく。

此の如き所謂る科學的世界觀と稱するものは、要するに本末顚倒の說明を執つたもので、科學としてもその眞義を失つたものであるが、その實際の結果は、道德や敎育の方面に重大な影響を及ぼし、人の精神に極めて忌まはしい結果を生じつゝある。卽ち萬有に對する機械的觀察で滿足するために、表面の知識に甘んずる樣になり、物事を知るといひ、物事が分かつたといふことが輕薄になる。人間の他の方面を疎んじ、單に知るといふ方面に偏するのみならず、知るといふことも極めて淺薄な意味に終る。一例でいへば、人間

研究的精神の衰頽

の感情を研究するに、感情の動搖に伴ふ、血液循環や筋肉伸縮の關係を生理的に研究して、それで感情が分かつたとする。此の場合に此等の生理的現象は、感情に伴ふ變化として、勿論大切の事には違ひないが、感情の實質は人間意識の事實であつて、それが如何に人の心を動かすか、又その動搖から如何なる考へ又働きが出るかといふ點が研究の中心であるべきに、その相伴現象が分かればそれで滿足する。恰も人の黑影を畫いて、それでその人の肖像だと思ひ、又はその人の畫姿のみを見て、その人物が分かつたとするに同じである。此の如き知識、表面知識だけで滿足する氣風は、研究の精神を弱める所以であつて、物事を研究するのは、その眞實の意味、即ち現實には現はれない秘密を探るのだといふ精神が弱くなるから、古來科學者の研究的精神を味ふことが出來ないのみならず、又自分自らにも眞の研究的精神を消磨する。何事についても、勇氣あり熱情ある眞摯の研究は、此の如き科學主義か

らは生じ得ない。

一體、物事を知るといふのは、その事の現實に基いて、而かもそれよりも深く入り、その物事の眞消息と自分の理性との契合を發見するにある。先に述べた如く、差別相の中に平等相を發見し、現實を觀念の中に收め、外界現象の意味を己れの心と契合するが、眞實の研究である。それ故に、眞の研究心には、物事自らを尊重する心がなければならぬ。眞面目な學生が、教育を受けるに當つてその師に對するが如く、又は寶の山を探る人が、一歩一歩寶珠の地を踏むに當つての心持の如く、尊重畏敬の態度を以て萬有に對するが研究の心である。此の如き尊重の心は、即ち又その獲物を得ての喜悅、滿足を豫想しての事であるから、それに伴つて熱誠情熱が伴はなければならぬ。此は所謂る Maiden coy を以て萬有に對する心、戀する者が戀人に對する思慕の情に同じである。シルレルが、智慧の宮に入る人の心地を叙して、悅び

輕薄な科學主義

に醉ふといつたのも、プラトーンが天上の智慧を求める愛の火と稱したのも此である。何となれば、此の如くにして科學の研究をなし、眞理の發見に進むのは、我々の人智が、萬有の中に現はれて居る天理に結婚しやうとするに均しく、只外物として之を觀察するのでない。

然るに機械的の科學觀には、火を拔き去つた蒸氣機關を觀察する人の如く、その構造は分かつても、その動く所以と、生々の活動とを見ることは出來ない。そこでその知識は表面に止まつて、早合點、早分かりで滿足し、眞の研究の熱情がないから、秘密を探り出す勇氣がなく、又知識に統一聯絡を缺く。勇氣熱情の缺乏は、即ち意志の薄弱といふことになるから、此の如き科學觀又は科學教育は、又道德實行の上に、輕浮の弊を生じ、知識に統一がないから、知識は斷片的、局部的になり、理想もなく希望もなく、雄大深遠の思想に遠かる。それ故科學思想、科學教育の問題は、教育として見ては、單に智

智育問題は又德育問題

科學の輕信と宗教の盲信

育の問題でなしに、又實に德育上の問題である。今の世に、學者といはず、學生といはず、何れの方面にも、何事についても早分かりを好み、又之に安んずる氣風が多く、そこで研究にも生活にも浮薄輕卒の弊があるのは、社會全體の生活案配にも因るが、又淺薄な科學主義もその一分の責を辭し得ない。早分かりで滿足するから、何事も深入りしないで、只管新を追ふて走り、而して新學說、新主義は走馬燈の如くに變轉して、何人もそれに失望せざるを得ず、輕信の反動としては、失望の懷疑にもなれば、又萬事を冷笑するすましし込みにもなる。主我放埒や反抗破壞などは、此の如き傾向の中からも生ずる。智育問題は即ち德育問題だといふ所以は玆にある。

＊　＊　＊　＊　＊

輕薄淺見な科學主義といふのは、畢竟科學の精神を得ない結果であるが、今の教育社會には此の如きものが多く、それが盲信の宗教と相對する。科學

の弊が輕信にある如く、今日宗教の弊は盲信にある。現存の宗教は、何れもその發生の新鮮な氣力を消磨し去つて、多くは在來の遺傳や形式に殘つて居る。宗教は前代の遺物に過ぎないといふ評は、決して酷評でなく、現在の宗教に對しては、正當の評である。但し玆に忘れてならぬことは、この前代の遺物にも、尙信仰の力は殘つて居ることであつて、その力は隨分多數の人にとつて安心の種でもあるが、又同時に盲信や迷信の種となる。此といふも、元來何れの宗教も、宗教信仰の心髓たる或る點を捕へて興つたものであつて、その感化は容易に失せず、又人心には宗教を需要する性と、幷に傳來を尊重する心があるからである。而かも宗教心の心髓といへども、時に應じ人に對して特に力說勸發すべき點が違ふから、前代の感化はそのまゝで今日の力とならないことも多い。且つ宗教には、その信仰の中心以外、更にその成立當時の思想や、又歷史の傳來が加はつて、その混合が現在の宗教になつて居るのであ

るから、それ等の附屬が今日の思想や需要と衝突しても、之を固守する樣になる。此に於てその信仰は、傳來に對する盲信にもなれば、現在直接の利益需要に結び附いては迷信にもなる。此が即ち今日の宗教と今日の科學との反撥する所以である。

今日の事實は歷々之を證明して居る。「神道の神道たる所以は、神ながらの道として、人間の純朴な誠心を發揮した點にあり、又日本の道として大切なのは、それが此の國の歷史や社會の組織、民間の習俗に結びついて居る點にある。」然るに此の長所は又今日に於けるその缺點であつて、純朴の誠が複雜な思想を支配し、嚮導する力を失ひ、又社會的因習は今日の變遷と步調を保ち得ない。神道を基として、祖先崇拜や神社崇敬を奬勵しても、このまゝでは一片の形式に終るは明白である。「神ながらの誠が如何にして複雜な思想又は雄大な思想を容れ得るか、又その歷史的因緣が、日本國民の繼續性を維持しつゝ

その日新の氣運に乘じ得るか、此が今後神道の運命を決すべき要點であつて、國民全體としての大問題である。

儒教に至つては、天の命に率ふといひ、格物致知の手段を盡し、修身齊家の道を修めるなど、皆千古不磨の教である。然しながら、その天命の思想には、支那古代の政治思想が附き纏ひ、その格物致知には陰陽五行などの學說が內容になり、修身齊家には、牧畜時代から農業時代に亘つての家長制度の形式が離れない。先にも述べた如く、儒教の倫理が上下の從屬關係のみに基いて、人の人格を認めない如きは、現代の氣風と正に相背く點であつて、教育社會に行はれて居る儒教主義が、多くは形式の保守主義となり、儒者といへば即ち頑固屋の異名の如くなつて居るのは、此のためである。儒教の道や教を、如何に人心の活潑な活動に植ゑつけ、その忠信誠意の本意に依つて人心の輕薄を救ふか、是が儒教の死活問題であつて、又實に日本教育上の大

難關である。

佛教の理想は、萬物一如の實を人の生活に實にし、平等と差別との圓融を人生の力とするにある。それから出て來る佛教獨得の力は、人々をして各々心の奧を探らしめる觀心修養、この修養から生ずる安立と勇猛とにあり、又此の如く人々に心內本來の光明を見せしめるから、自由の氣風と共に宏遠の理想がある。然しながら、先に佛教思想の批評に述べた通り、萬物融合の觀念は思想の解體に傾き易く、本來面目の發揮は、個人私情の放埒を養ひ、その上に又印度の學風、極端な唯心主義が伴つて、道德の無視にも走る。現代の佛教は、寺院組織の無秩序と道德の紊亂といふ重患がつき纏ふて、その思想信仰の發揮は、そのために殆ど生命を失はんとして居る。而かも佛教の思想は、深く國民の感情生活に根を張つて居て、日本人の氣風や生活、美術や文學と共に、尙ほ强く國民の精神を支配して居るのであるから、その興亡は

單に佛教といふ一宗派の問題でなく、實に日本國民の精神生活に關する大切の樞機である。

キリスト教は、日本に入つて日は尙ほ淺いが、その根本信仰である神人の交通、この交通靈感から湧き出る道德の生命に於ては、苟も人に心のある以上、强い感化を與へる力はあり、先にも述べた通り、人格の力、道德思想の點に於ては、今までにも已に案外深い勢力を占め、今後も此の力は衰へる筈はない。然しながら、キリスト教には、ユダヤ教から遺傳した排斥氣風、頑强な一神思想が附き纏ふて、この點では東洋文明の寬濶な氣風、萬有神的の信仰と相容れ難いものがある。その二又、今日日本のキリスト教には、アメリカから來た新教氣風が多く、どつしりした氣宇に乏しく、活潑の裏には輕卒の分子が交り、それと共に西洋近世文明の弱點と難題とを隨伴して居る。神道が頑固なれば、キリスト教は輕薄で、儒教が形式に流れるなら、キリスト

教は傳來の權威を重んぜず、佛教が疥癬に罹つて居るとすれば、キリスト教は脚氣患者である。

此等の點は先に思想界の評論に述べた點と關聯して居るが、要するに、何れの宗教も、各々その精髓と、それから出て來る必然の教へに於ては、色々の點で日本人を感化し、又現在科學主義の教育を矯正すべきものであるが、その天職を果すための力が、色々の附屬惡弊缺點のために蔽はれて居る。此等の關係を觀て來れば、各宗教は、各々他山の石として相切磋して、その精神特色を發揮すべきは勿論、今日の社會は、その根本の弱點たる現實主義を矯正するため、教育はその大缺點たる科學萬能の迷夢から醒めるために、宗教の精神に入つて、その源泉を汲む覺悟がなくてはならぬ。宗教が自分だけで社會の感化を荷つて立つと思つて、教育を呪咀するは勿論非であるが、今日の教育が今の主義に滿足して、宗教の精神をも併せ棄てるのは惡である。二者共に重

大な弱點を有し、惡弊に苦みつゝ、その渦中に陷つて互に相排斥するのは、畢竟自ら知らず、又他を知らないからのことである。同じ因厄に陷り、同じ難關に遭遇して、而して二者が互に相扶くべき位置に居ながら、相排斥するとは、何たる不幸ぞ。

＊　＊　＊　＊

教育の根本缺陷

教育と宗教とが共に遭遇して居る難關、二者の背反のために社會が蒙りつつある害惡は、實に德育の缺陷に最も著しく顯はれて居る。今日教育の缺陷は、その方法や材料の不備でなくて、一貫した精神の缺乏にある。之を一個人として見れば、色々の事を能く識つて居ても、知識に統一がなければ、博識も用をなさず、又德行の心得はあり、又可なり篤實に德目を守り行つても、その根底に信念と熱誠とがなくば、その道德は頗る危い。今日教育の實狀は、一國としても此の如きものがあり、智育は科學に基き、德育は勅語を精神とするとは定まつて居るが、現實主義の弊はこの方面にも現はれて、勅語の大精神を活用し得ない狀態にある。言葉を換へていへば、形式の上では整つて來たが、まだ魂が入つてない。科學研究の背後には、形而上的觀念、理想主義の土臺が必要であり、德育の奥には、道に對する信念がなくてはならぬ。此の信念といふのは、單に承認と確信といふだけでなしに、自分の身心を道に打ち委せる依托歸命の態度を指すのである。輕卒な個人主義は續々此の如き信念を破壞し、而して教育は知らずにではあらうが、この破壞を助長しつゝある。

一貫精神の缺乏

最も著しい點を云へば、德目が規則の如く併列して、その間を一貫する理想が十分有力になつて居ない。例へば、勅語に宣せられた夫婦、朋友その他の道德が、皆集まつて共に皇運扶翼の道たる所以に對して、今日の教育者に果してどれだけの覺悟があるか。又軍人に賜はつた勅諭にも、忠節、禮義、武

勇等五つの德を總括して、天地の公道、人倫の常經である旨を明にし、又之を實行するには唯一つ誠の心を要すと諭されてあるが、此の點の覺悟は、教育社會にどれだけ行はれて居やうか。教授細目や注意事項などには、如何にも科學の統一とか、修身を中心としての聯絡などいふことを說明してあるが、その精神にどれだけの生命があるか。勅語に宣せられた大道に對する要點は、後章、勅教と教育の下に述べるから、茲には畧するが、兎に角、今日の教育社會には經驗主義のみ行はれて、理想主義の力が微弱であるのだから、勅語勅諭に一貫した精神理想は、そうつと横に置いて、その表面のみを規則の如く教へる樣になるのは、自然の勢である。

現實主義の勢力は、例へば國民道德といふ觀念にも現はれ、教育者の大多數は、國民道德の特色といふ方面、卽ち差別相のみを見て、此の差別特色と遍通不悖の道との關係などは、之を考へない人が多い。その中で最も穩健に、

人道の平等と國民道德の差別相とは別でないといふ考への人すら、人道を單に抽象に過ぎないとして、特殊道德の外に事前の理を否定する。先にも述べた如く、事實が現實に現はれるには、その基く源泉がなくてはならず、この源泉は卽ち事實に先つて行はれて居る平等相、卽ち事前の理であつて、權威に服するといふのは、卽ち事前の理を尊重するにある。然るに今の教育社會には、現實主義の思想が多く、事前の理など云ふのは抽象の迷だとし、皇祖肇國の宏遠なる威德についても、單に過去の歷史に對する解釋だとして、その德が教育の淵源たる理を想はない。教育者に權威がないといふのは、一つは時勢の關係もあるが、その大本は教育者自らに權威といふ理想がないためでないか。今の樣な現實主義の教育社會に、權威が衰へるのは、今日の教育思想そのものゝ必然の結果であつて、總てが目前の實益効果を追ふて走り、古今に通じて謬らないといふ一貫の理想が缺乏して居るのが、その最大の病根

である。國民道德といふ考へが、往々にして偏狹となり形式となるのも、一に理想根抵に對する尊重の精神、不動の確信が缺けて居るためである。

理想の缺乏、是れ一に現實主義の弊であつて、その結果、道德は便宜約束乃至は社會的規則である如く、從つて德育は口から口に傳へることになり、心から心に傳へ、靈で靈を感化するといふ力がなくなる。道德のことは人々の靈性に根を持つて、心の眞底から湧き出すべき力、而して教育はこの根本が事實となつた人格の力で、人々の靈性を引き出すにあり、所謂る健孚感應の事實である。この啓發には、勿論教授の方法をも材料をも具へなければならぬ。然し云ふまでもなく、授業は方法であつて、此の方法や材料を活かすのは、教育者と被教育者との氣合ひ、意氣込み、即ち精神的感應である。感應の力は人格を動かす唯一の力であつて、人生の經緯たる慈愛と權威とは、皆これに依つて行はれ、而して人格的感化が行はれる所以は、實に教育といふ事

業の源泉、事前の理である。この根本の理を認めず、自分自らの理想は、何等事前の理を認めない教育者ならば、その施す教育で、德育が形式に走り、內から人を化するのでなくて、外から教訓を與へるだけに終るのは、自然の勢である。德育の効果が擧がらないのは、その方針や材料の不備のためでなく、實に人格の力が缺乏するからであり、而してこの缺點は教育者自らの思想が現實主義に支配せられ、理想の信仰がないから來る結果である。

且つや道德の基本は、如何に遍通であつても、又德育の主義は國民道德を養ふにあつても、その當事者、教育者も被教育者も、共に個人としての人格を具へ、この人格の力がその實効を呈する。人格に自由を與へず、その尊嚴を尊重しなければ、百の訓練、千の注意を與へても、德育の力を發揮することは出來ない。然るに今の教育は、國家教育の方針を一定すると稱して、隨分教育者に束縛を加へ、彼等自身の信念で動くよりも、寧ろ規則や命令で人

を動かす。多數教育者は殆どその人格の自由を奪はれ、規則や命令を行ふ機械となりつゝある。その思想は、壓迫の中に呼吸し、その行動は鐵鎖に縛られ、その上に統計とか報告とかのために、授業以外に多く時間を奪はれ、新鮮の空氣は、有形にも無形にも十分に吸ふことの出來ない狀態に居る。或る地方の校長が嘆息したのを直接に聞いたが、教育者は色々の方面で規則や情實に拘束を受け、殆ど厩に繫がれた馬の如く、千里の駿足も延ばし樣はなく只々機械的に忠實に盲從して行く外ないと。又或る地方長官は僕に語つたが、教育の方面の如くに、規則や指令や伺ひなどの多いのは、外の行政にはないと。此の狀態は、多くの教育雜誌に現はれる教員の不平や嘆聲が十分之を證明して居る。而してこの束縛の一つは、例へば宗教信仰の禁制（事實殆ど禁制に近い）に現はれて、教育者のみは信教の自由を奪はれた感がある。勿論此には色々の事情と又教育管理者の申譯もあるが、その理由の如何に拘はらず、教育者には自己を沒しなければ、御規則通りに働けないと云ふが、今日の實情である。窒息する空氣の中に居る人が、新鮮の活氣を以て、又熱誠と信仰とを以て、活きた人格の感化を與へ得ないのは當然の事でないか。

機械的教育

被教育者の側も亦此と同樣であつて、特に中學の教育では、何事も多くは結果を定理の如くに與へられ、自ら探り自ら究める自由は勿論少く、又その氣風は益す壓迫せられる。先に科學教育について述べた如く、科學の教授は研究の趣味を與へないで、その定說を定規的を注ぎ込み、語學は文典の諳誦になり、德育は書物の講釋となる。三年級以上の中學生は、青年の發動期に際して、最も活動を要求し、內には燃える如き自發進取の氣象が動き初めて居るに、教育はどこまでも一定の課程、一定の細目に隨ふのみの機械的授業になつて居る。此に於て自ら思想を發表したいものは、所謂る投書雜誌の壇上に赴き、そこで自然主義にかぶれる者がどれだけ多いか。曾て中學校長會議

青年の壓迫

（と記憶する）が、生徒に讀ませてならぬ雜誌を擧げて、多くの小說雜誌を列べたが、その他に今云つた樣な投書雜誌で中學生が惡風に感染する道具になつて居るものは、一つも擧げてなかつた。勿論我輩は此の如き禁書目錄の無効を熟知して、此の如き禁書列擧を非とするものであるが、その結果で見ても、中學敎育者には、生徒の實情に通ぜず、又その心理狀態を考へない人が如何に多いかを知るに足る。兎に角、學校では、規則づくめで、ルテンを繰り返す、而して生徒の自發心は抑へても抑へられない。そこでその結果は反抗氣風となるか、然らずんば因循無氣力になる。その結果は大學の學生にも現はれて、自發的研究心の乏しいことに於ては、日本の大學生が世界第一であらう。要するに被敎育者の人格を尊重せず、何事も規則を見て人を認めないといふのが、今日最大の敎育病になつて居る。

＊　＊　＊　＊　＊

此等の病を療治するには、先づ第一に敎育者並に敎育行政者の、敎育に對する覺悟を一新しなければならぬは勿論であるが、この覺悟の一新には、實に信念ある人格の養成と、信仰の尊重とを必要とする。即ち各自信念の立場に立ち、理想に對する自信があり、而して人生の根本に敬虔な人格、是が敎育並に社會一般の氣風を刷新し振興する所以の要契である。此の如き精神的刷新は、單に制度の變更や、學科の諳記で出來るものでなく、一般に思想界に理想主義の精神を傳播するにある。即ち一方には個人人格の尊嚴を發揮して、自由の氣風の中に信念を昂め、それと同時に、この人格の力は實に人間精神の平等相に基き、慈愛の中に生活し、權威に服して動くといふ理想主義を興すにある。此の二方面は、一見しては反對の如く見えるが、二者は差別と平等との關係であつて、その圓融調和は敎育の目的であり、又宗敎の理想である。特に宗敎の精神は、人々各々己れの源泉を慕ひ、遍流の生命を

自己の人格に體得して、現實を理想化し、差別の中に平等を實現するにあるから、氣風の刷新、理想主義の振興は、實に宗教的信仰が特に天職とする所である。此の心、此の理想が根本に確立し、この覺悟が信仰の生活となればの基本は至誠の上に立つ樣になる。勿論、今日現存の宗教が全然この理想を果すに足るとは云はないが、此の如き精神は、今日の宗教の中にも存在してその原動力になつて居るのであるから、之を活用するのは、即ち教育界なり又一般社會に對する刷新を行ふ所以である。近年、教育者の間にも、亦一般青年の間にも、信仰求道の精神が大に興りつゝあるのは著しい事實である。此は壓抑しやうとしても抑へ切れることでなく、今日の鬱屈して居る社會の氣風を晴らすのは、一に現實主義を打破して、宗教的理想主義を發揮するにある。

九　宗教と教育

「直接の職分に差異があるため、宗教と教育との分界を明かにする要を認め、そこで二者が相疎隔する樣になつたのは、畢竟、平等と差別との關係について、世人の見解が偏屈なるの致す所。」その同を見て異を思はないのも非であるが、その異を知つて、同を察しないのも亦大なる誤である。その上宗教と教育と差異のある所を見、それを極端に追ひつめ、宗教は偏に超世彼岸の空理だと斷じ、教育は只管現實實際の事だと定め、而しておいて二者が相容れないといふことを力說するのは、論據要請の甚しいものであつて、先に云つた如く、鈎瓶の上下を正反對相容れないとするに似て居る。

「宗教も教育も、人間天然の至情に基いて、人性に率つた生活の實現を期す

るに至つては一つである。人生は慈愛の生活、融和の舞臺であり、又それと共に、永遠の權威が我々の生命を支配する。この消息を心に會得して之に隨順した生活を營み、又この理想を發揮する樣に努力する、此が人生の究竟でないか。天地人生に慈愛調和を觀ずるのは、即ち眞理探究の基本であり、又道德生活の原理であつて、此の基礎があればこそ、人は互に感化し又互に協同し得るのである。而してこの感化協同を律する秩序は、即ち天然では理法となり、人事には權威となる。宗教も教育も、人生の此の二方面の自覺を人に與へ、この覺悟を啓發して人生を圓滿にするを目的とする。云ふまでもなく、宗教や教育があつて、人生あるのでなく、人生の意味を明かにし、又それを事實にするのが、宗教にしても教育にしても、その他萬般の人文活動の目的である。今の宗教も教育も、その割據的氣風のために、この大目的を忘れ、又互に相扶くべき關係を看過して居るのでないか。

根本に於て、又目的に於て、同一のものも、必しもその直接に目指す目途や手段方法に於て同一とはいへない。人生を圓滿にするため、人格を完成するために、宗教は最終の理想を重んじ、教育は直接の目途を大切にする。それ故に宗教の信仰は、いつでも究竟最終の理想を自覺せしめやうとし、教育は直接に社會のために有益の人物を作らうとする。同じ科學にしても、宗教の眼から見れば、萬有一如の究竟理想を示す一手段となり、教育から云へば、生活に有効な智能を啓發して、之を利用厚生の道に應用する道具となる。古のユダヤの諺にある如く、神を畏れるは智慧の始めであつて、科學の眞理といふも、萬有を一貫した生命、理法の一顯現として意味のあることになる。パウロが『たとへ一切の奥義、一切の科學を知るとも、愛なければ何物にもあらず』といつて、萬事皆神の愛に基くとしたのも此にある。又佛教の如く觀心觀法を重んずる宗教では、科學も亦此の如く萬有をこの一心に攝して、

その中に己心の現はれを觀ずる手段である。儒教でも、格物知致は、天理を敬し、人道を踏むで、身を修め、天下を治めるための方法となる。即ち宗教的信仰の立場から云へば、科學は各々その方面を分つて居ても、共にこの宇宙人生の消息を伺ふ方法となり、形而下の學問も畢竟は形而上の理想に流れ入る。茲に宗教の理想に照らして見た科學統一の原理並に意味がある。然るに教育から云へば、此の如き最終の理想は、直接の必要事でなく、直接現前の萬有に對して正確の會得を得、眞相の知識を與へれば足りるので、而して此等の知識は、必じも知識それ自らのためでなく、生活を豐富にし、その方法を發達させるためになる。然しながら、この二方面は決して衝突するものでない。宗教といへども、最終の理想のために、現前の用を無視し、又現實の實相を蔑視してならず、此の如くにして差別相を棄てた平等の理想に偏しては、惡平等になり、現實を離れる。教育といへども、只管直接の利用厚生

だけでなしに、眞に氣宇の宏大な人物を養成するには、どうしても科學研究の根本精神を忘れてならぬ。この精神を忘れたために、現在の教育が如何なる弊に苦みつゝあるかは、先に述べた所である。

道德の事に至つても亦同樣である。宗教信仰の立場から云へば、人生の道德は、究竟の理想に觸れ、又最終の根據から湧き出るのでなくば、完全といへない。通常の道德として見れば、必しも此の樣な理想の要はなく、社會に處して、その因習又は義理に從へば足り、教育は此の如き道德の人を作れば、その目的は一應之を達した譯である。然るに宗教は、此では滿足しない。例へて云へば、佛教の戒（Sila）即ち德行は、波羅蜜、到彼岸、即ち大覺の理想に往く道筋であつて、禪定、智慧、精進、眞實などの道行と並び行はなければ、意味を失ふことになる。又戒即ち道德を、慧（即ち智慧の悟り）と定（即ち靜觀思惟）と並べては、手と手と相洗ふ如く、その一のみでは目的を失ふ

といふもこの意味である。儒教が道や教を人の性と天の命とに基くものとし、その道德訓には色々規律的の事を教へると共に、根本に人の性を發揮し、天の命を敬する樣に導くのも、亦單純な實證主義の道德教と異なる點である。「キリスト教の理想は、天の父の完きが如くに、人々自らの性を完全に發表し、又道德としては天の父の御意を行ふにある。『汝等食ふにも、飲むにも、又何事をなすにも、總て神の光榮のためにせよ』との教へや、妻が夫に從ふのもキリストに事へる心を以てし、夫が妻を愛するのも、キリストがその教會を愛する如くにせよなど（エフェソ書五——六章）、皆道德の源泉を天父の信仰に求めたもの。」

道德に對する宗教の要求は、その最後に於て根を最高の理想に求め その實行を信仰から湧出せしめるにある。即ち道德を、その實行の結果に依らず、又社會的因習の力に頼まず、どこまでも信仰理想の上に築き上げやうとするの

が宗教的道德であるから、此に一般の道德觀念と合はない主義がある。此の主義を極端に及ぼせば、終には善惡超絶の道德撥無にもなる。簡單に云へば、差別相を沒して平等に歸入する傾向がある。世の道德家や教育家が宗教を攻擊するのは、主としてこの點にあり、支那でも日本でも、儒家が强く佛教を排擊したのは、佛教の中でも、特に禪風の超絶觀が、支那傳來の道德觀念并に實行（特に禮記にある如き）を無視したからである。又ロマ帝政の末路に、ストア學者がキリスト教を敵としたのも、此と同樣。此等は經世家の注意すべき點である。然しながら、此に注意すべきことには、宗教の善惡超絶觀（それを明白に提出した場合）で、善惡といふのは、功利の立場から見ての得失、又は社會的因習で成り立つた善惡觀に對するものであつて、決して善惡の區別を全然否定するものでなく、つまりは善惡の內容や標準が違ふから生ずる衝突である。勿論、宗教の中には、所謂る惡平等觀で道德を輕視す

宗教的道德の自由主義

るものもあり、又その傾向は何れにもあるが、如何なる宗教といへども、その最高理想から定めた善惡の區別は、どうしても之を棄てることは出來ず、而して宗教の道德がその高潔な理想を發揮する場合には、いつでも差別拘泥に對して平等の方面を高調し、因習の繼續性に對して革新的要求を代表し、現實主義に對して理想主義を鼓吹するにある。先に述べた如く、西曆紀元前五六世紀に起つた宗教精神の勃興は、何れも皆此の方面の精神を發揮したものであつて、孔子といへども、或る點では、在來の道德に對して理想主義を持ち出した人であつた。そのために終に當世に容れられず、道の天下に行はれざるを嘆じ、知己を天下後世に待つたのである。キリストの說教に、往々奇矯に似た言說があつて、父の御意を行ふものは、皆吾が兄弟なりとか、又は子をしてその親に背かしめるとか、汝の敵を愛せよなどいつたは、皆この方面から觀察して、その眞意の在る所を察すべきである。片言隻句を執つて聖賢の精神を偏して取るのは、理想主義を發揮する所以でない。豫言者が故鄉に容れられないのは、要するに豫言的精神を以て理想を力說する場合には、傳來の觀念、因習の道德と衝突することの多いのを示したものである。

教育の實用主義

「教育家が宗教を排斥するのは、一はこの豫言的精神に對する反抗であつて、この場合、教育家はやはり社會的勢力を代表することになる。」教育が國家の方針として成立した主義に基き、國民道德を涵養するには、どうしても社會の因習に基き、一般人民の需要を參照して、穩健の道を執る必要のあるは、云ふまでもないことであつて、そのためには必しも道德を最終の理想に押しつめる要はない。特に國民教育が、國家の自衞と直接の繁昌とを目的とする以上は、自衞のために社會の繼續性に重きをおき、繁榮のために現在並に近い將來の効果を目當にして、遠く又高い理想を考へ得ないのは、至當のことである。此の點に於ては宗教の理想的信仰や豫言的革新的精神は、どうして

も一般の教育に讓歩し調和するのみでは足りない。此がために、教育と宗教との衝突を來した事實、又衝突する患のあるのは、明白である。然しながら茲に教育家並に經世家が大に考ふべき點がある。

教育や經世の仕事には、第一に社會國家の繼續性を重んずる必要がある故、どうしても保守に傾き易く、又現實差別相を主とするから、その考へは狹隘になり、現實主義に陷る憂が甚だ多い。教育は個人の人格を養成するといつても、主として現在の社會に生活するに適した人といふことを目途にするから、その方針は、場合によつては姑息に流れ易い。先に社會と個人との關係について述べた通り、社會全體のみを目安として行けば、その弊は保守と形式とになり、その極は終に反動として革命的運動を喚び起す樣になる。冬の寒い日に、一室を閉ぢ切つて、爐に火を起して居れば、安樂であるが、その極は窒息に近い空氣の中に安坐して、新鮮の空氣に觸れない樣になる。茲に

戸外運動をし、又は通氣法を施す必要がある。宗教の理想主義、宗教的天才の師子吼は、實に此の通氣法に似たもので、國民教育が、その保守と形式とを增上しては、終に一室の中に窒息するに至る。

現代の日本、特に教育社會は、この通氣法を要する狀態にある。鬱屈した空氣が充滿して、益すその保守氣風を固めやうとして、窓を開く開濶の氣象に乏しいから、この壓迫と、それに對する反抗とが相激し、溫暖な教育の空氣の中には、自然主義や破壞思想の惡ガスが發生しつゝある。是れ所謂豫言者の野に叫ぶべき時、理想主義の師子吼を放つべき時、精神上の通氣を宏大な理想に求むべき時でないか。國民教育はその方針を立て、又熱心に之を貫くべきは勿論であつて、決して突飛突進してはならぬが、又それと共に窮屈の空氣を排斥して、理想主義の新鮮な空氣を容れなければならぬ。このためには、古今の偉大の宗教的人格の力、又宗教的信念の力に待つことが、

甚だ多いでないか。極端の衝突、革命的氣運の激成に陷らない樣するには、どうしても理想信仰の通氣法を行はなければならぬ。

然しながら、宗教の道德には、尙ほ他の一方がある。即ち宗教はその感化を弘く民衆に及ぼす必要からして、その道德に色々の讓歩をし、彼等と調子を合はせる傾き、一言にして云へば迎合の傾きがある。假令へ良藥でも、非常に苦いものは、乳糖で之を緩和し、芳烈の葡萄酒でも、下戸に飲ませるには甘くしてやる。而して宗教が長い歷史を持ち、弘く下層社會にも及ぶ樣になつては、乳糖の量は段々多くなつて、苦藥の効力が少くなり、甘い酒は終に惡い混成酒になるに似たものがある。社會の惡風にも讓歩しては、終に却て之を助長し、愚民の迷信を迎合しては、自ら迷信の發賣元になる如き弊が、特に今日の神道や佛教に多いのは、衆目の睹る所、そのために教育者が宗教を排斥するのは、至當又必然のことである。日本の諺には、『腐つても鯛』といふが、假令へ鯛でも腐つては、到底食物にならぬ。西洋の諺に、『最も良いものの腐敗は最も惡い』Corruptio optimi pessima といふ方が本當であつて、今日の宗教には、此の如き腐敗が多い。然しながら又、風呂の水と共に赤坊を流し去つてはならぬ。今日宗教の弊を見て、教育家の中には、只管宗教を嫌忌し、青年の勃々たる求道心、眞摯な信仰をも壓迫しやうとして、そのために、悲慘の結果を呈して居ることは甚だ多い。此の如き宗教毛嫌ひのために、求道の心を挫かれ、信仰の道を失ひ、而してそし反對の極端に自然主義反抗氣風に走りつゝある者が、小學教員や中學生の間に、今日どれだけあるか。青年淸新の氣象は、因習や形式の力で束縛し切れるものでなく、勃々たる精神に對しては、雄大な精神を以て開濶な理想主義を與へなければならぬ。此の如き精神の供給は、一國精神上の嚮導者の任務であつて、而して今日宗教の中にも、淸新の氣象と活き〳〵した信念の感化を與へつゝある新時代の宗

清新の宗教家

教育社會の壓迫に反抗してその道を傳へつゝある。例へば高山樗牛の熱誠一つで、天下幾萬の青年が、日蓮主義に活きた宗教信念を味ひ始めたか。一清澤滿之の勢力が、どれだけ渇したものに水を與へつゝあるか。松村介石、內ケ崎作三郎、加藤直士などの名だけを數へて見ても、キリスト教中の新進の感化は明白である。教育社會にも、勿論此の如き新感化はあらう。然るに宗教毛嫌のために、風呂の水と共に赤坊を流し去る者が、教育者の中に最も多きを占めて居るのは、實に斯民のための大損害でないか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

○宗教信念とその活用

「兎に角、科學の立場からいつても、道德の方面で見ても、宗教と教育とは、その目指す目標に違ひがある。」然し分け上る麓の路は異なつても、終には同じ高根の月を眺め得ないか。宗教は平等の理想を最高において、而かもそれに依つて差別現實を矯正し嚮道しなければならぬ。佛教では、最高理想に向つて進むのを往相といひ、それから立ち戻つて衆生救濟に從事するのを還相といひ、佛陀如來は即ち往相を成し遂げて還相の活動をする人格の標本である。故に佛徒の理想はこの人格に倣ふにあり、自ら如來の使と覺悟して、如來の室に入り、如來の衣を着け、如來の座に坐し、如來を己が肩に荷ふにある。斯の人は、即ち世間社會に活動して、衆生の闇を照らすべき人である。

○教育感化の源泉

「宗教を以て單に平等理想の事とし、往相のみに滿足するのは、獨善の人であつて、獨り教育の立場からして排斥すべきのみならず、完全な宗教としても亦、力を極めて排斥しなければならぬ。」

「此の如き宗教と相對して、教育は現實の人間、社會の教化に立脚地を定めるが、それと共に又根抵に於ては最高平等の理想に觸れるものがなくてはならぬ。」還相の人が、自ら如來の使たる自覺と、久遠の大道に基いた權威とを

以て人を化導する如くに、教育者も亦、現實教化の裏面にはこの大信念と自覺がなくてはならぬ。「教育家の勞力は、色々材料を整へ、教育の方法を盡すにあるが、その權威は久遠の大道から湧出するにあらずば、教育は力のないもの、生命のないものになる。」先に權威の章に述べた如く、教育家が教壇に立つて、一事一物の授業をするにも、「久遠の眞理を代表し、不變の大道の代官たる覺悟があるべきである。」此の如き覺悟があつて、始めて教育の眞權威は生ずる、而して此の如き覺悟は、一に教育家自らの信仰から湧き出るもの。彼れ自らに信念なくして、他に向つて權威を行はうとしても、それは空名か然らずは虛僞である。」自ら道を信順する人にして、始めて他人をして己れを信順せしめる力が出る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の如く見て來れば、宗教と教育とは、その直接の目標に於て異なる所があるために往々にして杆格を生ずるが、その根抵に入つて見れば決して相背くべきものでない。然しながら、我々はその同に偏して異を棄てるものでない。」二者の區別はその事業の方法手段にも現はれて、明かにその職務の區別を示して居る。「宗教の感化は、個人の信仰を基にして（即ち往相）、それから精神上の團結を生じ、又救濟の社會的事業を行ふ（即ち還相）。之に反して教育は、その制度を整へ方法を盡して、學校といふ機關によつて、人格の教育を勉める。宗教では、いくら教會の組織が出來、救濟の事業をしても、個人の心靈を直接に感化する力がなくば、その組織救濟は畢竟空である。教育といへども、勿論被教育者を一々感化し教導しなければならぬが、それはその個人一己のためでなくて、實に社會國家のためにするのであるから、教育の効果は主として方法設備の完否に依る。この差別は、單に表面のことだけではなしに、實にその目的の違ひから出、宗教は心靈の感化を本にし、教育は

二者の分界と相互補助

國民教育の立場に立つからである。」その爲めに、宗教は個人主義で、教育は國家主義だといふ區別を立て、此の差がある故に二者は相容れないといふ人がある。此は勿論謬見であるが、而かも此の區別は深い根のあること、それが此の如く手段方法の別となつて現はれるのである。

宗教と教育と、二者此の如き差別はある。この差別は、二者の分界の立つ所以であるが、又それが即ち二者の相補ひ相扶くべき所以である。宗教が平等相に偏し、理想に馳すれば、教育は差別相に依つて之を矯正し、現實に引き戻さなければならず、教育が保守になり形式に流れては、宗教は之に生氣を吹き入れて、信仰の生命を與へなければならぬ。宗教が個人の心靈を本位として、人格を重んずる點は、教育は大に之に習ひ、教育が制度方法を整へる長所は、宗教も之を奉行すべきであり、宗教は世界的精神や形而上的理想を國民に吹き込み、教育は又たそれに伴つて國家社會の需要を研究し、二者相扶ける要がある。夫婦が姓を分ち、業を分けて、共に俱に一家を成す如くに、二者が各々その本分を盡しつゝ、互に相理會し、同情し、而して協力し得たならば、國民の幸福之に過ぎるはない。

宗教の教育法

＊　＊　＊

宗教の感化は、或る點から云へば直覺感應であるが、その感化にも亦教育的方法の要はあり、キリストが人に應じ場合に依つて天國の說明を色々な譬喩で說いて居る如き、又は佛教の應病與藥の如き、その好適例である。キリストは、弟子以外初心の者共に說くに、譬喩を用ひた例は、マタイ福音書五、六、七、一三、二一、二二章などを見れば、その說教法を知るに足るが、是れ聞けども聞かず、見れども見ないものを諭す教育方法である。法華經の佛陀も亦、三世諸佛が一乘無二の法を說くための方便を明かにし、特にその對手即ち被教育者の性質や機根に應じて、應用すべき言辭と方便との力を詳說して

居る。尙ほ之を分析して云へば、佛陀の教育法には五つの方法があるといふ。五つとは義（事柄）、法（眞理）、度（程度分量）、時（時機順序）、衆（對手の性質）を知悉するにある。（根本佛教、五篇二章を見よ）。此等の教育順序は、即ち天台大師がその宗教哲學兼教育哲學を組織した大本であつて、日本では日蓮上人は又、教機時國序の五法を兼ね備へんと期した。（田中智學氏、日蓮聖人の教義を見よ）。

○宗教の人格的證明と感化

「然し茲に最も注意すべきことは、宗教家――少くともその偉人――の教育法は、單にその內容や方法を具へるのみでなしに、それ等を盡く人格の力で說き、說くまゝに行ひ、行ふ通りに說く人格の力でその感化を及ぼす點にある。」それ故に日蓮上人は、自らの一生が即ち法華經の事實說法即ち身讀だとして、日蓮だにこの國に生まれ、又佐渡の島に流されずば、法華經乃至一切の佛說は虛僞になるまで信じて之を行つたのである。此の如きを如說修行の行者といひ、又色（身命）心相應の信者といひ、信仰と生命とが一つにならなければ、眞の教化は施されないとの主義を最も明かにしたものである。

眞理とは何ぞや

佛教の行者が、如來の使であり、如來の道はしめ給ふ所だといふのも此にあり、日蓮が自らの頭には大覺世尊宿らせ給ふとの自信を以て教化を布いたも此にある。」キリストが代官ピラトに對して、『我れは眞理を證明せんために世に來れり』と云ひ、而してピラトが『眞理とは何ぞや』と問ふたに對して答へなかつたのは、共に、この身即ち眞理だとの實例を示したものである。又その遭難の前に、弟子等に訓へて『汝等、心騷ぐべからず、神を信ずれば、我をも信ぜよ、……汝等我れを知りなば、又必ず我が父をも知らん』といつたのも、實に身を以て教とした人の言である。『我れは道なり、眞理なり、生命なり』との言や、又その感化は實に此から出る。（ヨハネ福音書十四章を見よ）。「佛陀とキリストとが、符節を合はせた如くに、『我れに來れ』との言を以

○教育者人格の力

て人を率ひたのは　宗教的感化を與へる人、宗教家として教育を施す人の態度を説明して餘りある。

「教育の材料方法以外、更に人格の力、是れ實に宗教的感化の生命であつて、又同時に教育の眞生命である。」今日宗教の感化が衰へたといふのも、又教育がその事業の整頓に比例した實効を擧げ得ないのも、皆この一事に歸着する。そこで教育にとつての最大問題は教育者の人格といふ事になるは云ふまでもなく　人格といふのは、單に一定の性格を具へて居るといふのみならず、その性格が認識の光りで照らされ、自信自覺の力で生命の事實となるにある。簡單に云へば言行一致であるが、信仰が生命の事實となつた以上は、その人の一言一行は、皆信仰自覺の源泉から湧き出て人を動かす力を呈する樣になる。所謂靈の感化といふも、畢竟は人格の力であつて、その一々の言説行動以上、更に精神の根抵に不動の基礎があり、この靈力が人を動かすのである。「人を動かすのは人の力、心を化するのは只心の力であつて、言行や方法はこの力の發表に外ならぬ。此の如き感化力が獨り宗教の感化に必要なるのみならず、教育といへども、眞の感化を及ぼすには、此の源泉が必須である」のは、今更云ふだけが蛇足である心地がするが、然し今の社會には特に之を力説する必要がある。

○人格の基礎と内容

人格、自覺などいへば、隨分如何なる事にしても、自信があつて之を貫徹する意志があれば足りる如く考へる人も少くなからう。「然しながら眞に人心を感化するに足る人格の力には、それだけの基礎と内容とが具はらなければならぬ。此の基礎といふのは、即ち慈愛と權威とを兼ね具へ、その慈愛は人生の調和を自得し、その權威は天地の秩序を體現したにある。」先に譬喩で云つた通りに、熱海の溫泉と大島の噴火とが相影響するのは、實に目に見えぬ地下に聯絡があり、共通の源泉があるからであるが、人と人との感化も亦此

人格的感化の源泉

に異なる事はない。人格の交通は、思想を傳へるにしても、感情で融和するにしても、要するに個々差別相を呈する人格が、その根抵に於て平等一如の源泉から出て居るが故である。キリストは自らを葡萄の幹に譬へ、信ずる者は皆その枝だとして居るが、同一の根、同一の幹から出て居ればこそ、枝はその生命を共同にして果を結び得るのである。人格の感化が此の如く人心人生の同じ根から出る果、同じ泉から流れる水であるからは、他に感化を及ぼさうといふ人は、自分自らその根に歸り、その源を尋ねる心がなくてならぬ。「キリストが我が父を信ずるものは、我が兄弟なりと宣した如く、人生を一貫した大慈愛の根本に自らを托し、この愛を體得した者にして、始めて慈愛の道を傳へ、又之を行つて人を動かし得る」。我れは是れ如來の使、我れは是れ道なりとの覺悟があり、自分自ら永遠の大道に率ひ、人の性を盡し誠を致し天の命に從ふ者にして、始めてこの大道の權威を代表して、人を敎へ、人を

敎育者の人格と信念

命令し得る。孔子が、天の己れに命ずる所の大なるを信じて道を傳へ、藤樹が良知を實現すれば、何れの人も聖なりとして、德敎とは我が身で之を行ふにあるとしたのも、皆此の覺悟から出て居る。人格の力とは、畢竟自ら道に入つた人が、道の源泉から得來つた力である。

此の如く見て來れば、敎育者の人格問題といふことは、畢竟その信仰問題である。その信仰が人生の根抵たる久遠の道、慈愛と權威との源泉に入り得たや否や、玆に人格的感化の力があるや否やの要契が存する。知識を研き、敎授の內容を豐にし、その方法を整へるのは敎育に切要の事たるは勿論であるが、此は末の結果であつて、その本は實に敎育者自身の信仰が、如何に深く人生の根抵に入り得たや否やにある。『花は梢に咲き、木の實は土に歸る。』『根なき草は枯れ、親なき子は人に卑まる。』信仰の根なき者 慈愛と權威との久遠の父母を仰がない者は、到底感化の力を擧げることは出來ない。玆に

宗教の根本問題もあれば、教育者の根本覺悟も亦此にある。今の教育界には果して根があるか、教育者には果して親があるか。教育と宗教と別物と考ふる人は、此の點を熟考し沈思して自ら吟味すべきである。

十　勅教と國體と宗教

教育に關する勅語が、國民教育の標準であり、又國民道德の大精神を宣べさせられたといふ一事に對しては、何人も異議のあるべき筈はない。日本の教育社會でこの一事を常套語として、繰り反すのは殆ど蛇足を添へるの感がある。然しながら、國民教育といひ、國民道德といひ、又その標準といふ意義內容に至つては、常套語の反復で滿足することは出來ない。況や又勅語に宣せられた國體、教育、斯道といふ觀念とその應用に至つては、その中に實に重大で又深遠な問題が宿つて居る。此等の問題を考へないで、單に勅語を奉ずるといふのは、教育の精神を形式で束縛し、又勅語の大精神を枯渇する所以である。

勅語の名稱

教育に關する勅語、この名稱は文部省の公稱であつて、勅語の中に教育の淵源を宣べさせられ、又時の文部大臣が　陛下の教育に軫念させ給ふことを述べて、之を宣布したから出て居る。此は勿論當を得たことであるが、若し茲に教育といふのを獨り文部省の管轄監督の下にある教育、學校といふ制度設備の下に行はれる教育とのみ考ふる人があれば、それは實に勅語の大精神に背く者である。此の如きは殆ど杞憂に過ぎない樣であるが、今の教育社會には、多少此種の謬見が行はれ、教育者で勅語を何か自己專有の金則の如く吹聽し、又教育者の立場から見た解釋のみを勅語の精神と主張する者があるのを見れば、此の點に付て先づ一應の反省を求めるは已むを得ないことである。

國民教育の範圍

國民の義務教育は國民教化の基本であるが、又實にその端緒に過ぎない。それより以後の中等又高等教育といへども、人間教化の必要機關であるが、その一局部たるに留まる。此等の教育以上、又それ以外に人心感化の區域と

國民道德の意義

必要とは、實に莫大なものであつて、國民の教育といふことは、弘く云へば此等全體の感化嚮導を包括して居、又包括する樣に進まなければならぬ。『三つ兒の癖、百まで』で、此の弘濶の教育は、勿論兒童期の教育が基になるが、而かも之を發達し馴致して進むのは、今の所謂る教育のみのことでなく、弘くいへば、政治も經濟も文學も皆この機關となつて行くべきである。此と同じく、又國民道德といふことも、國民としての資格を作り、品性を陶冶するといふが眼目になるが、人間は寄石細工でないから、單に國民として現在社會の一員たる外に、弘く人間たる資性も需要もあれば、深く遠く人性の大本を發揮する必要もある。國民の道德といふことは、現實の社會に適應する樣にといふ以上、更に永遠の基本を發揮し、不朽の道に進むといふ理想がなければならぬ。若し此等の消息を思はないで、國民教育や國民道德を、何か教育社會なるものゝ專賣の如く心得、而して此の如き意味で、教育の標準とし

教育見解の狹隘

て勅語を獨占する樣な氣風があれば、是れ實に聖旨の賊であつて、又實に教育や道德の眞義を誤まるものである。

此の如き種類の誤見が行はれやうとは、殆ど思推し難きことであるが、事實存在するから仕方がない。（今茲には一々事實を列擧しないが、先達ての床次次官の私見に對する教育家の批評などにもその一端は現はれて居る。）此には色々の原因はあるが、その第一は教育界の氣風、即ち教育者には弘く社會に接し社會を觀る機會が少いと、（此には師範教育の學風が大に關係する、）又一つには教育界に理想主義の思想が壓迫を受けて居るとの致す所である、一言でいへば、その眼界思想が狹隘であるために、勅語の精神を狹い方面のみから觀るに因る。此の主要原因と共に、教育に關する勅語、又教育勅語といふ名稱も餘程この累をなす原因であるかと思へる。一體勅語の大旨內容は、一面現在國民の道德を宣揚せられたもの、新に日本國民の道として教へられたものに違ひないが、それと共に他面には日本建國の宏大な理想と、斯道の永遠な權威とを御示しになつて居、陛下御自身も、臣民と共に拳々服膺の誠を盡さうと仰せられて居る。それ故に、その中にある教育の淵源といふには、宏大深遠の理想を含蓄して居るのは、明瞭の事である。然るに教育といふことを專門的に又技術的に見る人の仲間で、之を教育勅語として傳へたためにその狹隘な見解の中に勅語を入れやうとするのではなからうか。

勅語の名稱

若し我々の觀察が不當でないとすれば、勅語に對する態度を定め、その大精神を發揚する上に於て、根本に人々の精神を入れ換へると共に、又その名を正す必要がある。假令へ文部省の公稱であつても、それが誤に導き易いならば、勅語は文部當局者の特產でないのは勿論であるから、それ以上に適當の稱呼を用ひるのは決して不當のことでない。我々が茲に田中智學氏の提案にかゝる勅教といふ名を用ひるのは、一は誤解に導きを與へた稱呼を避け

勅教

勅教の教たる所以

ると共に、これが實に勅語の大精神に副ふた名であると信ずるからである。單に勅語といふのは勿論正當であるが、此は一般名稱であるから、特稱を附し、又その內容精神の實に副ふた稱呼を用ひるならば、勅教といふが正當である。何となれば、この勅語は、實に日本國に事實となつて居て、而かも人類全體に及ぶべき大道を宣揚せられたものであるから、玆に一大宗教（弘い意味で）又は大德教が現はれ、而して此は過去に不朽の淵源があるのみならず、未來萬世に通ずべき人間の教へである。而して此の教は、抽象の理論研究から出たのでなくて、祖宗の遺訓に基かせられ、又天壤無窮の皇祚を踏ませらるゝ權威を以て宣布せられた勅命である。（此等のことは後に尙ほ述べる）然らば之を勅教と稱して決して不當ではない。

斯く云へば、勅教と稱して、佛教とか儒教とかいふ一々の宗派と相對し相分けて一宗教を立てるに似るとの非難があらう。然し此の如きは、抑も教といふものに對して、宗派的偏見を抱いた觀察をする狹い量見から出ることである。佛教、儒教、キリスト教などが宗派的に分立して居るのは、實にその特別な歷史因緣や、特色事情が附き纏ふためであつて、此の點からいへば勅教も亦日本國の成り立とその歷史とを背後に具へた一流の德教である。然しながら、佛教でもその他何れの宗教も、その歷史事情といふだけが萬事でなく、その大本は、どこかに、又どれだけか、遍通性に人に率ひ、不滅に人心を支配する力があり、それがその生命を維持して居るのである。勿論その生命の發現や又內容については、種々の觀察を施し得るが、兎に角それ等が教たる所以は、即ち宗教の本性たるもの、人心感化の源泉たるものがあるからである。勅教も亦古今不謬の斯道を宣揚せられた方面に於ては、特に又それが（前に述べた如く）理論でなしに事實に基いた德教であるからは、教の教たる大本は玆に具はつて居る。之を道と稱し教と稱してならぬなど考へるのは

實に勅語を以て何か規律命令の如く心得るためでないか。

勅敎は、或る意味では、佛敎、儒敎と相並んだ敎へとも云ひ得やうが、その相並ぶといふのは實に不變の大道を宣せられたといふ點に於て、同樣の根抵から出た德敎であるといふことに歸する。然しながら、他の方面から云へば、佛敎その他の宗敎は、世界的宗敎であつても、日本國民を感化する上に於ては、この國民の立場に立ち、その國家の生命に依つて事實となつた道德、信仰、理想に副ふて、之を翼賛し、扶翼して、その生活と需要とに順應しなければならぬ。此は先に世界的宗敎を說明して述べておいたことであるが、此の上から云へば、日本の爲めには、佛敎もキリスト敎も皆、勅敎の脚註解釋たるべきである。從つて又、世に勅敎を狹隘に解釋し、その精神を局部に押しつめ、その德敎を形式的に限らうとするものがあれば、之に對して戰ひ、それを矯正し、勅敎の大精神を發揮するために、各宗本來の根本信念を以て

するのも、註釋としての務めである。

斯く云へば、又他の方面から、此の如くにして勅語を私解で我田引水してならぬと非難するものがあらう。此は恰も朱子が孔子を註釋したのを、王學派の人が、聖人の意を賊ふものだといふに均しいが、何れの私解註釋が、眞に勅敎の精神を發揮するや否やは、その主義內容に依つて定まることであつて、私解するが故に惡いといふのではない。如何なる大道も——從つて又勅語も——その大旨が之を奉ずる人の確信となつて、始めてその人を動かし支配する力となる。而して人々の確信は、勿論その人の內心から湧出し、その眞心信仰を支配する力であるから、その方から云へば個人の私見、私解である。若し私解が惡いといふならば、如何なる德敎も、只規則形式たるに止まつて、人生を感化する力になり得ない。いやに恐れ多いといふ言葉のみを使つて勅語に對する理想の解釋を拒絕しやうとするのは、恰も經文を祕文とし

服膺の誠と信仰

て人に示さない宗教、法律に威嚴を附げやうとして民衆に公示しないと同樣に、精神の活用を杜絶するものである。我輩は、教育界の人々に對し、勅教に對する自己の信仰を告白する度に、此の如き攻擊を受げるが、此の如き非難は、要するに勅教を以て命令規則と同一視し、その教の教たる所以を思はないからである。

前章に、教育者の人格について、眞の教育者は、古來の宗教的偉人と同樣の精神を以て、自ら道を代表する覺悟があるべきことを述べたが、勅教に對しても亦同樣である。即ち勅教に於て、陛下は祖宗の御遺訓に基かせられて建國の宏德を宣揚し、御自身躬らこの道を服膺しやうと仰せられた如くに、教育者たらんものは、この勅語に對して拳々服膺の誠を盡すは勿論のことである。而して此の誠を盡さうとするには、即ち斯の道の大本を尋ね、その大旨を宣揚し發揮するを任としなければならぬ。宣揚し發揮するに當つては、

現實主義の勅語觀

又斯道に對する自らの信仰があるべく、而して信仰の源泉は、又一切の德教、一切の宗教に根抵となつて居る不變遍通の眞理に基くべきは必然のこと。此の源泉を尋ねて、之を佛教に發見し、又は儒教、又はキリスト教にも發見し得たならば、その宗教の信仰を以て勅教の註釋として、何の差支があるか。人格的感化の力は實に此の如き信仰から生ずる。この信仰の內容については、尙ほ後段に述べやうが、勅語を勅教と稱する說明に附げて一言しておく。

兎に角、今の教育社會には、現實主義の思想が橫溢して居るために、勅教に對しても、その立場から差別見を固守して、勅教の大道を見ない人が多い。そこで勅教と宗教とを對立し、勅教に依つて宗教を排斥し、終に道の本源をも忘れる。宗教も勅教と同一の源泉から出るなど云へば、此の如き人は驚心して、勅教の尊嚴を害するなといふが、その人こそ實に勅教を形式化する者であつて、斯道の宏大な基本を思はないものである。勅教についてそれと宗

教との關係を説明するに先つて、先づ此の種の偏見と戰はなければならぬのは、實に慨嘆の至りである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

德行とその一貫の基本

勅教はその直接の目的に於て道德の教訓である。親子、兄弟、夫婦、朋友の道、社會的生活の道德、國家に對する道德、此等が整然として勅語に宣示せられて居ることは云ふまでもなく、此等が國民道德の大綱たることも亦勿論である。但し此を以て單に德行の項目と見るべきでない。此等の德は、共に合して天壤無窮の皇運を扶翼する道であつて、即ちこの國家の生命を增進すると共に、又我等が祖先の美風を發揚する所以である。この意味が炳然たるは、即ちそれが日本國民の勅教たる所以であつて、又即ち克忠克孝の事實を實行する基本である。忠孝一貫の道德が、その基本に於て色々の解釋を容れ得るは勿論であるが、それが宏遠なる建國の理想と、この國體の靈德とに

勅教の基本たるは教育

基くべきは炳然の理であつて、茲に此等の德目に一貫の理想あることを見なければならぬ。

この事は、今日の教育者も十分會得して居るに違ひないが、今日の實狀として、德目の上に統一一貫の實が缺けて居るのは、何に因るか。忠孝の奬說と國體に對する信念とが十分に結びついて居ない感が甚だ多いのは、何の故であるか。教育者は、その樣な事はないと打ち消さうが、我々の觀察では此は事實である。その證據には、德を樹るといふその德に對する觀念は、教育者の間に決して明瞭でない。又君民同祖を說かなければ、忠孝一本を說明し得ず、日本の國體を明かにすることが出來ないといふ意見が、教育社會に多いのを見ても、此等の道德を以て、歷史因緣だけで生じたといふ考へに支配せられて居るを見るに足る。即ち教育社會には、やはり現實主義に基いた道德觀念が多く、此の國體に依つて事實となつて居る德を、何か特殊の事情

一貫の道とその實行

で生じたもの、そこに必然遍通の根據はないとする見方が多きを占めて居るのである。軍人に賜はつた勅諭には、――先に述べた如く――五つの德は、天地の公道人倫の常經たることを明言せられ、又この勅語にも、斯道が中外に施して悖らない人間の大道なる所以を御示しになつて居るに係らず、教育社會には、この道德の大本と建國の理想とを必然に結び付けて考へる人が少いではないか。兎に角、道德の項目に對して一貫の根抵を見やうとせず、人間の道德生活に事前の理あるを思はないのが、勅敎に對する偏狹の見解を生む元であつて、而して此が又德育の効果に遺憾の多い原因である。

我々は、一方に道德全體に亘つての一貫統一の根據を要求し、而して勅敎には之に對して適切な敎を垂れさせてある。（この點は後段に國體を論ずる場合に讓る。）然し此と共に、我々は單に根據を發見し理想を發揮するのみで道德の事終れりとするのでないことは勿論であつて、此の如き理想主義に偏

するは、古來佛敎や又は陽明學派の宿弊であつて、儒者が佛敎に對し、朱子學派が陽明學派に對して痛擊を加へた點である。今日敎育社會に宗敎を空想に過ぎないとして之を排斥する人のあるは、實に此の點を衝いたものとして大切の消息を傳へて居る。而して勅敎は、單に理想主義を說かれたのでないから、一々の實行項目をも擧げ、又拳々服膺の誠を御示しになつて居る。天の命、人の性は道德の基本であるが、それが道となり敎となつて、適切に修身齊家の實行とならなければ、道德の道德たる所以はない。佛敎でいつても、單に本來の佛性を悟つたのみでは、何の詮もなく、この覺悟と信仰とが源泉になつて、自利利他の菩薩道となり、六波密羅の實行とならなければならぬ。この要契を失したものは、獨覺獨善の人となり、自分勝手の往生發願となり、又野狐禪となる。

敎育界には、道德を現象としてのみ見る人が多く、宗敎にはその根本覺悟

だけに止まる者が多い。即ち道德に關して、教育家は事に偏し、宗教家は理に偏する。是れ共に道德の眞相でなく、又勅教の御精神でない。事理の兩端を具へ、事實と理想とを能く攝取して、道德の實は擧がる。是れ勅教が、その中に於ては道德の項目を示し、而して始めに於ては、その淵源を、終に於てはその遍通の應用（即ち流通）を御示しになつて居る所以である。道德の教訓として勅教の內容について、教育家も宗教家も、共に能く沈思してほしい。我々はこの事理雙全の御教訓を奉戴する上に於て、共に俱に誠意に考へ、誠實に實行に進まなければならぬ。

道德の實行は此の如く國民生活の綱紀として事實になり、又個人各自の誠意に基くべきである。而して此の實行に進ましめるのは、教へ、即ち教育感化である。此の教育が第一は學校の教育にあると共に、又弘く國民一般の德教としては、獨り所謂る教育社會の專有でも特權でもない。勅語が、その初

めに於て建國の威德から生じて、世々實効を擧げて來た忠孝を以て國體の精華にして、又教育の淵源なりと仰せられたのは、實に道と教との關係を簡明に發揮せられたものである。先にも屢々述べた如く、國民教育の直接の目的は、有用なる國民を作るにある。然しその根抵に入つて見れば、眞に國民らしき國民、日本人として祖先の美風を發揚し、範を子孫に垂れる國民を作り上げるには、この直接の目的に深遠の意味と理想とがあるを發揮しなければならぬ。即ちこの歷史を知り、國民の傳承を尊重し、又現在に處して篤實誠實の生を送るは、勿論必要であるが、それ以上更に深い信があるべきである。即ちこの國史は國體の威德が事實となつて現はれ、この國民の道德は、惟神の道、天地の公道を體現したものであることを確信し、永遠に人心を支配する道に基いて德を修する人物を養成する、此が教育の究竟理想たるべきである。此の如き教育は、即ち能くその淵源を汲み分け、勅語の宏大なる

精神に副ふものである。

此の樣な意味での忠孝は、即ち天地人生の慈愛を體し、その權威に悅服するものであり、この忠孝基本の教育は、國民としての德を盡さしめると同時に、人道平等の道を國民の生活に現はす所以である。而して勅教は、實に此の如き教育の大本を、國體と人道との上に示され、併せて此の大本は、三世を通じて渙はらない大道であることを垂示せられたものと信ずる。然らば、勅教は、一方通常所謂る教育の標準たるは勿論であり、又弘く一般に國民教育の精神たるには違ひないが、又それと共にこの國家の生命として、過去の歷史にも現はれた德に基いて、又未來に亘つて世界人心を感化すべき德教の大本である。この勅語を盾として、宗教を排斥する如きは、宗教の何たるを知らないと共に、又勅教を局限して、その大精神を窘縮するものである。

＊　＊　＊　＊

斯く見て來て、勅教の中に遍通永遠の德教を發揚すれば、この德教と日本國體との關係を特に考へなければならぬ。この點については、昨年南北朝問題を論ずる場合にも之を論じて、一般教育者の間に行はれて居る國體觀念の缺陷を痛破したが、當の對手たる教育者の中から、一の贊否を聞かない。一姉崎の議論として輕んずるのは人々の勝手であらうが、彼等の大標準として居る勅語の要點について、流行の意見を破して居るに、何等の聲もないには驚くと共に訝らざるを得ない。さては標置自高の風に狎れて、この大事を忘れたものか。聖賢の遺訓に依り、德教と國家との肝要に關する析伏をも、一學者の空論として棄てゝおくといふのか。此の如き教育界なればこそ、その中心から南北朝問題をも起し、此の如き氣風なればこそ、責任ある國務大臣が、大逆事件を議會に說明して、その原因を經濟事情に片附けて恬然として居るのである。國體觀念の淺薄不透明、是れ實に勅教の精神が教育者の間に發

現實的國體觀

揮せられない大原因であるぞ。

此について第一に破すべきは、國體に關する現實的解釋である。日本の國體は、君民同祖、一國一家の如く、その歷史の長い間忠順の實を盡して來た結果だとする。此れが即ち最も弘く行はれて居る國體論であつて、それで皇室の尊嚴をも國體の卓越をも說明し得たとするもの、滔々皆是れである。我輩といへども、日本が島帝國として、その團結に特殊の粘着力のあるのを熟知する。又その歷史の始には異人種が雜居し、後には歸化民が混入しても、それが殆ど一家の心持ちになつた如く見えるといふことを否定しない。然しながら、此の如き歷史的因緣が國體だとする淺見に至つては、どこまでも反對せざるを得ない。義理の上で反對する外に、事實の上でも、此の如き國體說の不透徹を明にしたい。

君民同祖

若し同一人種、又はそれに似たといふ事實が、國民性の本性、國體の源泉

ならば、同一人種と感せず、又さう取り扱はれない樣多はどうする、又今日でも歸化民は國體の範圍に入らぬか。獨りそれのみならず、平安王政瓦解の後、種族割據の勢が復活した場合に、多くの武士は、自族の長者あるを知つて天子あるを知らず、院か犬かといふものを生じた如き、明かに君民同祖の感のなかつた人民のあるを證するでないか。君民同祖又は君民和親の歷史因緣のみが國體を作るならば、鎌倉足利の世には、勿論、今日の日本にも、まだ國體は存在しないといふことになるでないか。又將來にも、同血族と思はないものは、日本の臣民となれないのか。此の如き薄弱で又偶然に似た國體ならば、ロマ人が皆共にロムルスの子孫と思ひ、印度人が、四民皆梵天から出たと信じて居たのと、どれだけ違ふか。又此の如きものが眞に國體の唯一基本であるならば、若し歷史上又は人種學上、日本人民が皇室と血統を同うしないとの證明が立つた日には、日本の國體は破壞するといふのか。又然ら

ずして、國體を維持するためには、此の如き學術研究を拒絶して、歴史を作り上げよといふのか。若しさすれば、チャンバレンが、日本人は、今皇帝崇拜といふ新宗教を、人工的に作りつゝあるとの非難を、謹んで受けやうといふのか。

君民同祖の事實は、太古に溯るに及ばず、歴史――長い二千五百年の歴史で――君民の關係が出來上つた。此は國家の團結上、都合好いことであるから、此を維持する樣に勉めるのが、忠君愛國であるといふ者もある。彼のキリスト教が國體を害するといふ説を唱へ、自ら國體擁護を以て任じて居らる加藤老博士の如きは、正しく此の説の主張者である。人間の道德も法律も動物の生存競爭が高じて、社會で强者の權利が行はれる樣になつた結果であり、日本國家の成立も此の數に漏れない。而して日本國では、强者の權利が皇室に集中して、萬民之に服して都合の好い團結を維持するといふが、博士

の國體説明である。道德も法律も――從つて又國體も――都合が好いから、利益があるから、之を維持せよといはれるが、都合が好いから維持するならば、都合が惡くなつたから御免を被らうといふ思想が出て來たら、どうすることになるか。かく云へば、必や都合が惡くなる筈はないから、その樣なことは杞憂であると云はれやう。よろしい、此は杞憂として棄てゝおいても、單に維持するといふならば、その進步發揚といふことは不用にならないか。生存競爭は今までは大にやつて來て、强者の權利が成り立つたから、一旦成り立つたものは、單に之を維持して行けばよいといふことになりはしないか。然し元が眞に競爭の結果で、强いものゝ權利が認めらるゝならば、今後も尙同樣の競爭を許し――否奬勵し――而して强いものが出て來るをも辭し得ないでないか。便宜で出來たものならば、便宜で變更してならぬとはいひ得ない。力で生じて來たものならば、力で破るを不當といひ得る權利はどこから

出て來る。又力や便宜で出來たものならば、その中に慈愛も權威も湧いて來るといふことは、どうして説明するか。

我々は現實主義の國體觀に對して、此等の問題を明確に解釋してくれることを要求する。然し我々はそれ等の意見を一々辯論するまでもなく、勅敎そのものも、皇祖皇宗の御事蹟も、皆明かに此等の現實主義を摧破して居るのを見る。

建國の威德とは何

『皇祖皇宗國を肇ること宏遠に、德を樹ること深厚なり』との御敎を思ひ見よ。宏遠なる建國の權威、深厚なる皇德といふ觀念は、卽ちこの國禮が此の如き現實主義で説明せられ得べき者でなく、歷史因緣は勿論見なければならぬが、それだけで出來上つたのでないといふ斷定を明白に表せられてある。便宜や力づくで出來たものならば、如何にして德を樹てたといひ得るか。歷史の成り行きで生じたものならば、偶然事情の持ち合ひといはなければならぬ、

然らば此を以て宏遠なる建國の基といひ得るか。我々は、決して勅語の御文のみを盾として斯くいふのではない。この建國樹德の事實、又その事實が明示して居る理想に依つて、現實主義の國體に反對するのである。大日孁貴の御誕生に際して、『この子光華明彩にして、六合の內を照徹す』との言は、その德が偶然に生じたのでなく、又力や便宜でないといふことを明言して居る。且つや女神にましまして、而かも威嚴と明智とを具へます大神と、暴力亂暴の素尊との對照から見ても、八百萬神が力量に與しないで、德光に忠實であつたといふ點から見ても、又天孫降臨の御依托使命に見ても、所謂る樹德の偶然でないといふ理想は明白である。（尙ほ此の點については、『南北朝問題と國體の大義』六〇—八一を見よ。）

この天成の靈德は、神武聖帝の建國に際して一層明白になつて現はれて來た。『正を養ひて』『西偏を治めました皇統の正嫡が、堂々東征の師を起された

のは、實に『皇祖皇考慶を積み、暉を重ね』ました權威に基いたもの。而してこの權威は又、『元々を鎭め』る慈愛となり、『六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇となす』べき大理想となつたのである。此の德と力と、權威と慈愛とは、決て生存競爭の結果や歷史の成行事情みのから發すべきものでない。此の懿德は、强者の權利の正反對である。崇神天皇の詔は、此の如き現實主義の摧破でないか。『我が皇祖、諸の天皇等、宸極に光臨しますことは豈一身の爲めならんや、蓋し人神を司收して天下を經綸する所以なり、故に世に玄功を闡き、時に至德を流く。』それ故に、四道將軍を派せられたのも、單に力づくめの征服でなくて、實に敎育のためである。『民を導くの本は敎化にあり。』この一事實に玄功至德の發揮實行である。此より以後、聖德太子の憲法や、御歷代の詔勅宣命は、至る所に、この國體の基く所を明示せられ、その中に、今日行はれる如き現實主義の趣意に似た樣なものは一もない。我

輩は御歷代の詔勅を盾にとつて、反對論者に當たるのは、最も避けたいと思ふ所であるが、現實主義論がその偏僻の淺見を以て國體を解釋し、而してその俄作りの國體論を以て大切の理想を破壞しやうとするから、彼れの武器を奪つて彼れに當らなければならぬ已むを得ない立場に立つ。

國體の精華は、實に建國の懿德が深厚久遠の根抵に据わつて居ればこそ、古今に通じて謬りない道となり、敎育の淵源は、偶生特發の事情に成るものでないから、中外に施して悖らざる權威を具へる。億兆が心を一にし得るのは國家團結の賜であり、世々厥の美を濟したのは、歷史の事實となつて現はれるが、その源泉——即ち事前の理は——この國民の生命を作り上げる先天の德である。この德を實行して、君民心を一にするのは、即ち拳々服膺の誠であつて、誠は天の道、人の性、又この國民の生命である。天の道といひ、人の性といつて、只理を論ずるは、却て道の賊であつて、人々その誠を盡して

道の生命實現

皇運扶翼の道

教に率ひ道を行ふて、道は始めて生命ある事實になる。而してこの事實の生命は、御歴代の聖德、臣民の忠節となつて、日本の歴史に現はれ、この國體は單に先天の理、深遠の德たるに止まらず、國家の生命として生々發展し來り、又どこまでも發展して行くべきである。この點に於ては、皇祖皇宗の靈德と御遺訓と、我々臣民が祖先の美風と、我々自ら幷に後代孫々の誠實なる服膺と、皆合して一つの道をなして居る。我々の生活は、この一貫一乘の道を現在に實現する所以であるから、あらゆる德行は、皆相集まつて、天壤無窮の皇運を扶翼し、國體の精華を發揚する所以になるのである。

抑も德育の効果について、遺憾の多いのは、種々外部からの妨害ある外に、教育部内で、德目を一貫した理想信仰のないに因る。而して此の理想が缺けて居るのは、勅教の御精神を窘縮して、一々の德行皆皇運扶翼の道たるを十分に悟得しないためであり、皇運扶翼の消息が教育者に徹透して居ないのは

國體の本源と活用

實に國體に關する觀念が輕薄膚淺であるためでないか。此の觀念が明白でなく、又狹隘であるのは、又實に日本國民の生命とも理想ともいふべき建國の懿德が、天地の公道に基き、人生の常經を發揮した道、中外に施して悖らず、三世を一貫して渙はらない道であるとの信念が缺けて居るためである。

口を開けば國體を云々する人も、多くは皇室の萬世一系を以て國體とする。勿論、此の尊嚴の皇室がなくば、國體は成り立たないが、又臣民の忠順至誠も之に伴はずば、國體の實は活きて來ない。然らば皇室は國體の中軸であるが、それのみが國體でなく、この中軸たる萬世一系をも、又臣民の忠孝をも、共に生み出すべき根本の靈德理想が國の體、國民生活の大本實體であり、此の大本が君となり臣となり、又人生の道となり、その發表は忠孝の實行となるのである。要するに國體についてもその諸方面を總括して考へなければならぬ。此等の説明をば、便宜のために、之を表として示さう。

國體の五重義

勅語の御文	古史中の詔勅	近世風の云ひ方
我が國體	豐葦原の中つ國	日本國
概括稱呼（名）		
肇國宏遠 樹德深厚 敎育の淵源（大本實體）	大御神の靈德 積慶重暉 玄功至德（體）	建國の大本 國民の理想
皇祖皇宗 子朕孫（中心樞機（宗））	天壤無窮の寶祚	萬世一系の皇室
克忠克孝 國體の精華 古今不謬 中外不悖（發表作用（用））	光照彩徹 明六合 兼六合掩八紘 人神の司收 和を貴しとす 上和き下靡く 君臣共に信 萬代の福業 動植咸榮	君臣の同心 國憲の運用 國運の伸張 文明の開發 敎化の普及
父母に孝に以下）（民を導くの本 懲惡勸善）		

五義を見ざる國體觀の不備

（319）

忠良の臣民
祖先の遺風
遵守すべき道（敎化大義（敎）方、禮、信）
私に背き公に向ふ
天地經、人俗鎔範（大義名分
道義敎育）

この表は、之を古聖の遺訓に見、日本の歷史に照らし、國民の生活と道義の大本とに基いて、國體のあらゆる方面を總括したいがために試みたものであつて、我々の國體觀は、包括的に國體の本末根幹を包括したものである。萬世一系を以て國體とするのも誤りではないが、それのみなれば、宗を知つて體を思はないもの。又忠孝不二の實を觀取して、國體茲にありとするのも、勅語に基いた敎育に依つて國體を發揚しやうとするのも、勿論正當である。然し忠孝を以て單に君臣の血統的又は歷史的關係から出たとする人は、未だ國體の宗と用とが、國體の國體たる所以の大本から出た重要事を逸したもの。それと同じく、道義敎育を單に敎へとし、又勅敎を以て何か一片の敎訓規則命令の如く見る人は、この敎への淵源が、國體そのものゝ靈用にあるを忘れたものである。此の如く局部を以て全體とするから、國體觀念が動搖し、甚し

きに至つては國體の宣揚を一階級の特有の如く心得、勅敎を敎育のみに限らうとする如き謬見を生ずる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

國體觀念のことは重大事であるから、尙ほ重複を厭はず、『南北朝問題と國體の大義』の中の說明を抄略引用して重說しやう。

天壤無窮の寶祚、萬世一系の皇統、此は國體の要素には違ひないが、國體の實體そのものでなく、實體の發現であり、皇統の無窮と御稜威の發揚とは、國體といふ大本の因から出た結果であつて、皇室の御稜威はその力の發表である。國體の體（大本）とは、此等發表作用の總てに淵源となり、實質となつて居る靈德である。……この靈德は、根本の事實、久遠の法、事前の理であつて、之を開展すれば、あらゆる敎にも理論にもなり得る天地人生の靈德である。それ故、儒敎も佛敎も、日本國に入つては、此の大本に朝宗して、國

體の靈德を發揚し解釋する敎法となつたのである。……一言にして盡せば、天地化育の德が、天人統治の威嚴恩德となつて、天祖の御神靈に現はれた、此が國體の大本である。

この大本は、高天原に於ては、大御神が親ら之をお現はしになつて居るがそれは云はゞ、天上理想界に於ける國體の實體淵源であつて、その靈德が事實地上現世に行はれて、人間世界の生命とならなければならぬ。天孫降臨は即ちこの事實々現の第一着であつて、神武聖帝の御建國は、その進運の要機である。……而してこの理想の發表は、之を上より云へば、天祖の神勅と、之を下から云へば、神武天皇建國の御宣言とになつて表はれて居る。……國體の體（即ち大本實體）は、此に於てかその宗（即ち中心點）を地上の國家に實現するに至つた。國體實現の中心點たる皇室の宏謨は、即ちこの靈德の發表であつて、君臣の名分、國民の協同一致は、即ち國體の用（事實上の勢用）で

ある。……

皇室は國體の中心として、臣民は之を仰ぎ、その威德を奉行する手足として、君臣共に一體となつて、この靈德を發揚するのは、即ちこの國の天職であり、この天職を盡す上には、色々の作用を呈するが、その作用の規約樞機としては、教へがなくてはならぬ。大本が具はり、中心が確立し、靈德は存しても、若し教が之を整へ之を導かなければ、國體の發揚は、無意識には出來るとしても、自覺はなく、又平穩無事にこの宣明が行はれる場合はよいが、一旦亂を生じた日には、忽にまごつく。この教へは即ち國體の實現であつて、勅教にも明かに『教育の淵源亦實に此に存す』と宣べさせられた點である。その內容を云へば、則ち國體の大靈德を君とし親とし師として、至誠之を奉戴するにあつて、一言にして盡せば忠孝の教、信順忠貞の德である。我々臣民から云へば、此の教は皇室に對する忠貞の道であるが、御歷代の主上に於

かせられては、即ち皇祖皇宗に對せらるゝ御孝行である。……

教の內容としては忠孝の大道（此の意味は先に慈愛と權威の章に述べた）之を君臣の分に施せば名分となり、社會の秩序に施せば法となる。國體の大本は、この名教に依つて教化の活用を呈する。此を以て、聖德太子は憲法に於て、國家治道の大本を和の一事に据え、之を名教に施しては、『國に二君なく、民に兩主なし、率土の兆民は王を以て主となす』と教へ給ひ、而してこの大本の靈德を『四生の終歸、萬化の極宗』たる三寶に定めさせられた。三寶とは、佛教では佛法僧であるが、之を日本の國體に應用すれば、天祖の靈德と、その神勅幷に祖宗の御遺訓と、而して之を仰ぎ之を奉行する皇室幷に國民の協力同心の團結である。——是れ實に拳々服膺の誠から出た團結。——此の如くにして名教の教は、大化以後には、大寶延喜の諸の法制となつて現はれ、又皇祚の危機に際しては、鎌足の忠節となり、宇佐の神勅となつてその

化用を呈したのである。……

＊　＊　＊　＊

現實主義の邪說

國體に關する現實的解釋、即ち單なる歷史的說明や、强者權利說は、到底日本の國體に副ひ、その事實を解釋する所以の道でない。之に反して今まで述べ來つた國體觀は、少くとも國體の宏大なるを知らしむる一分の解釋としてどこまでも正當である。國體の事實に適つた說明である。若し此を不當とする人があらば、自分勝手の學說で駁擊せずして、古史に炳然たる祖宗の御遺訓に基いて、此の解釋を打破してほしい。然らざる限り、我輩は歷史成行の說明や、生存競爭說の國體說明を以て、國體を破る邪說と斷ずる。少くとも極めて不完全な國體說明と斷ずる。不完全であるが故に、宏遠なる建國の基礎を破るもの、深厚なる威德を汚すものとして、之を斥けざるを得ない。

兎に角、國體の觀念が正確ならば、勅敎に對する見解も自らその當を得、

而して此から流れ出る敎育の觀念も亦、今日の如く狹隘偏固になる譯はない。敎育の淵源が明になれば、一切の德行が皆共に皇運を扶翼する所以も自ら明白になり、而して斯の道が、古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざる理も、亦自ら悟り得られる。今日の敎育社會、而かもその重要な位置を占めて居る人が、一人ならず二人ならず、勅語の中で古今中外の事は、さまで重きを置かないでよいなどゝ放言する如きは、實に國體觀念の基本を誤つて居る證據である。且つ又、忠孝二德の重んずべきは之を口にしながら、之を單に現實の君父に限るか、さもなくば極めて方便的に形式的に祖先崇拜を唱へるに止まる如きも、亦忠孝が國體の活現として久遠の道たるを忘れたゝめである。それのみならず、忠孝は、文字として勅語に明かであるから之を唱へても、信順の誠に思ひ至らず　陛下御自身も、我々臣民と共に、その德を一にせんと仰せらるゝ大趣意を閑却する者の多いのは、――即ち勅語を以て、上

から下に命ぜられた敎とのみ見るのは――是れ皆祖宗の御遺訓に對せらるゝ陛下の御信順を思はないためである。

要するに、勅敎は、日本國の生命に現はれた天地公道の宣勅である。敎育といはず、宗敎又は道德といはず、苟くもその基本を久遠の理想に求め、人道の常經に依つて敎を布く以上は、その間に何等の杆格もなく、共に俱に此の大道に朝宗すべきである。而して宗敎は、各その敎の根本信仰に依つて、勅敎の內容を擴充し宣揚して始めて日本國民を感化し得る。今まで日本が儒敎を容れて、法制を整へ、社會道德を涵養したのも、佛敎を歡迎し、それに依つて平等回向の理想を養ひ、理想歸入の德を行つたも、皆此の道の擴充に資したものであつて、儒佛の偉人で此を以て志としない人はない。（外篇、日本宗敎の章を見よ。）その中で弊のあるものは、勿論國體の大本に依つて之を排除しなければならず、又日本の歷史は段々にその取捨を行つて今日に至つ

たのである。この取捨の間に種々の困難を生じ、又面倒を來すにしても、その樣なことを恐れて、外を排斥すべきでなく、將來にもこの方針は改むべきでない。是れ實に、六合照徹の神德を發揚し、六合を兼ね八紘を蔽ふ實を擧げる所以である。此の問題は、即ち新時代に處する國家の統一、東西文明の包容消化といふ大事にも現はれて居るのは、首章に論じた通りである。

それ故、維新の始め、國を開いて進取の方針を定められて以來、この國體の化用は、又西洋文明のあらゆる分子を攝取し、以て靈德の發揮に資して來た。その間には、彼の長を採つて我が短を補ふといふ點もあるが、その取捨は折衷組み合はせでなく、包容消化であり、單に彼れの長を採るばかりでなく、彼の短をも恐れないで、之をたゝき上げてやる覺悟をしなければならぬ。尤も此の如き自覺は、まだ我が同胞の自覺に上らず、又保守論者の驚天に値しやうが、事實、西洋文明の長短利害共に我が國に入りつゝある。此の大勢は

惡思想の折伏

到底生中な採長補短主義で抗し得るものでなく、文明の要素は此の如き勝手の撰擇を容れるものでない。（尙ほ外篇、西洋文明の由來を見よ。）若し然りとすれば、此の際我々の覺悟は、恐れず驚かず、進取の實を擧げて、彼れの長と共に短が入り來るならば、我が大道を本にして盡く之をたゝき上げ、鑄冶に鑄冶を重ねて、我が國民の生命で滓垢を去り純金を磨き上げる度胸と覺悟がなければならぬ。言を換へて此を云へば、社會主義、虛無主義、自然主義等、あらゆる惡思想は、西洋諸國でもその征討剿滅に腐心して、而かもその効力の擧がらないのに苦みつゝあるものであるから、單に之を外國の事とせず、日本の中に植ゑ附けても終に之を滅する、是れ我が國の天職でないか。是れ又我が國體の靈德が六合を照徹する實を擧げる所以でないか。國の力は兵戟で外國と戰つて勝つのみが能でない。惡思想を討滅し、社會の難問を解釋し、それに依つて新文明を作り出し、澤を四海に及ぼす、是れ特に我が國

の天職と自覺すべき所である。

この點は、先に『南北朝問題と國體の大義』との結尾に一言しておいたが、世人はまだその點に眼が着かないと見えて、耶蘇敎の毒害などゝ唱へて戰慄して居る人もある。而かもその說は、又實に現實主義の學說に基いたものであるが、要するに現實主義の輕薄な立場から國體を觀察するから、その靈德の力に對する信念が生せず、風聲鶴唳に慄き騷ぐのである。ましてキリスト敎なるものは、論者の云ふ如き愚說でもなければ、毒でもなく、又實に今まで日本に存在した敎の最も缺點とする人格の尊嚴を事實にするには最も有力の宗敎であり、その上その宗敎が今まで現はして來た旺盛の傳道精神は、小膽な保守論者の夢にもし得ざる力である。我れは進んで之を取らなければならぬ。若しそれに弊が伴ふならば、こゝへ呼びつけておいて、大にたゝくべしである。たゝいて立派なものに仕上げて、之をその本國たる西洋に逆輸出

をして、德澤を世界に及ぼすべきである。儒教も今後日本的に仕上げて支那に輸出すべく、佛教も日本にその精髓を傳へて來たのであるから、此を以て印度人を化すべきであり、その時は即ち勅敎がその中心の光明となつて、此等諸敎を醇化し、此等諸國を光被する時である。日蓮上人が、この點に於ては日本國民の覺醒を促した八幡諫曉抄の言に聽け。曰はく、『天竺國を月氏國と申すは、佛の出でさせ給ふべきしるしなり。扶桑國をば日本國と申す、聖人豈出現せざらんや。月は西より東に移る、月氏の佛法の東に流布すべき相なり。日は東より西に入る、日本の佛法の月氏に還るべき瑞相なり。月は光り明なからず、在世(佛の法華說法)は只八年なり。日は光明月に優れり、後五百歲の闇を照らすべき瑞相なり。』この精神に對して、小膽豆の如き保守論者は、何の感を抱くか。(尙ほ國體とその感化については、佐藤大佐の帝國々防史論二篇二章、田中智學氏勅敎玄義等の參照を望む。)

思へば、三四百年來、西洋諸國獨り昌へて、東洋は多く衰亡に傾く間に、日本のみは全くその數に漏れるのみならず、今日は東洋の衰運を挽回する先驅となつたこと、是れ一つの妙。印度、ペルシャ、支那の文化は、その本國には、或は亡び、沈淪して見る影もないに、日本にはそれ等の思想文物を保存し來り、その本國になくなつたもので日本に殘つて居る者も少くない、是れ一つの妙。獨り保存するのみならず、皆その粹を集めて、之に新生面を與へ、將來に活かし得る力あるは、日本のみ、是れ亦一つの妙。東洋諸國で西洋文明に觸れ、又之を容れたものも少くないが、彼等は打たれ、たゝかれして、已むを得ないで之を容れて來たのに、日本のみは、一旦開國の決心をして後は、進み喜んで之を容れ、而してその消化の結果を出し始めて居る、是れ亦一つの妙。此等は偶然として見るべきか、運命といふべきか、人各々見る所もあらうが、我々はどうしても、此等の妙用が偶然に發したとは思へない。

而して我等の國體觀念は、稍這般の消息を解釋するやに覺える。我々が茲に大に研究し大に覺悟すべき要契は、此の一事にあるではないか。

それは兎に角として、我が國の維新開國が、已に天地の公道を開いて、世界と共に文明の慶を享け、以て皇基を振起するにある以上は、又この皇基が千古不磨の靈德に發して居るからは、この國是に基いて取り入れる文物思想も亦皆、皇運扶翼の眞義を發揚すべき手段とならなければならぬ。外は通商貿易を盛にし、內は工業を興すのも、單に國の富を增すだけの目的であつてはならぬ。何となれば、理想なくして財を抱くのは、個人でも國家でも、禍の基であつて、富は私慾を行ふ具としては、その人その國を災する。此に一々實例を擧げるまでもなく、現在の社會はその事實に充滿して居る。軍備を充實し、兵力を張るのも、侵略征戰のみを目的にしてはならぬ。理想のない侵略は、虎狼の慾を逞うする手段であつて、此〳〵して强くなつた國は、又兵力と

領土とのために滅亡する。古來の大帝國、アッシリア、ペルシヤ、ロマ、蒙古、皆此の如くにして亡びた。我々は、日本國をして、富强のために腐敗し、衰亡せしむることがあつてはならぬ。獨り富强の道のみならず、教育、法律、文學、美術、何れにしても一國の大方針なく、理想の確信なしに、只管に制度設備を整へ、文物外觀を昌にするのみならば、皆亡國の具となる。此れ亦古今東西の歷史が歷々證明する所である。幸にして我が國には、國體の中心が殿として存し、而して開國進取の國是は動かすべからず。社會の思想文物、皆この中軸に朝宗し、この方針を貫くために、そのあらゆる努力と理想とをこの國體の發揚に回向して行く、是れが即ち皇運扶翼の眞意義でないか。智能を啓發し、德器を成就するのも、公益を廣め、世務を開くのも、皆此の大主義から出てこそ始めて意味あるものとなるでないが。

果して然らば、勅語を以て所謂る教育の專有の如く心得る不倫は云ふまで

教育者の覺醒

もなく。之を盾として西洋文明を排斥し、又は勅語に佛とか神とか宗教の事が現はれて居ないのを偏屈に解して、勅語は宗教を排斥する如く心得るとは何等の不心得ぞ。此の如き徒輩は、皇運扶翼の意義をも、建國の懿德をも知らない者、此の如くにして國體を說き、教育に從事するとは、何等の不倫ぞ。然しながら、この國體の威德は、終に此等の徒輩をも感化して、國體の眞味に感奮せしめる時があるに違ひない。但し時があらうとて、捨てゝおいてはいつまでもその時は來ない。この感化を行ひ、勅教の內容を擴充し宣揚するのは何人の任であるか。教育者も宗教家も、この一大事について、深く考へ確く覺悟すべきでないか。

* * * * * *

信仰問題と勅教

勅教についての考察を、今までは國家の立場から施して來たが、最後に尙ほ個人の信仰について考へる要がある。信仰問題といひ、宗教的安立といへば、多くの人は何か自分一個の安心のために修養とか信心とかに入る如く考へて居る。而して此の如き宗教は皆現實を嫌忌して理想の夢に耽る。現在の宗教宗派の中には、此の如き個人的安心、超絕的諦觀を以て滿足するものもある。先に述べた如く、淨土門や禪の一部には、確かにこの傾きがあり、又近頃三教會同に反對して、信仰は絕待であるから、協同も出來ず、國家にも交涉しないと論じた者は、此の部類に屬する。此の如きは、宗教否人生の本義である、個人と社會、差別と平等、現實と理想、初三章に論じた此等の圓融關係を誤つたものであつて、眞の信仰でなく又宗教でない。力ある宗教は個人を救ふと共に、國家を救ひ、眞の信仰は、理想を與へ平等を教へると共に、現實の生活を豐にし、差別を盛り立てる。此の點については、先に述べもし、又諸宗教に亘つて一々細說する暇もないから、之を略するが、日蓮上人の大論策たる立正安國論の結尾に、最も明確簡單にこの消息を語つてある。

『汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乘の一善に歸せよ。然らば則ち三界は皆佛國也、佛國其れ衰へんや。十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰滅なく、土に破壞なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん。この言信すべし、崇むべし。』

眞の宗教は、己れ獨り善を得るのでなく、國と共に衆と共に理想に達するにある。即ち佛國寶土の實を心靈の中にも地上にも建立するにある。是れバウロが信仰の團結を身體に比した所以であつて、『神は身體を調和し給ひて、缺乏せる所には、尙ほ豐かに光榮を加へ給へり。是れ身の中に分裂あることなく、四肢相一致して扶け合はんがためなり。』個人的安心の如きは、決して宗教の眞味を味つた者の安んずる所でない。

然らば、その信仰の內容とは何か。答は簡單である、天地の慈愛を身に引き受けて生活し、久遠の權威に悅服して、權威の光榮を發揚するにある。是れ即ち仁義の實であり、又忠孝の本である、而して之を奉行するは即ち信の德である。忠孝信、此の三つを行へば、宗教も教育もその目的を達して遺憾ない。勅教は實にこの三つの教である。而して諸の宗教は、此の理想を宣揚し、その意義を擴充し、その實行に進む教化方法である。今日の教育者は、先づ勅教を信ぜよ、而してその指南は之を聖賢の教に仰ぐべし、そこに宗教も生じ、教育も行はれる。久遠の君父師は、至る所に大音聲に我々に教へ、我々を醒まして居る。

今この三界は、皆是れ我が有なり、
その中は衆生は、悉く是れ吾が子なり。
而して今此の處には諸の患難多し、
唯我れ一人のみこそ能く救護をすなれ。

外篇第一

日本宗教史概觀

この一篇は、六年前、西洋人に見せるために、極めて概括的に日本宗教史を述べたものゝ和譯に少し增補したものである。今日の日本人には、一般に我々の祖先の宗教心について知識の缺乏して居る時代であり、又日本宗教史全體については、一つも良書が出て居ないから、此の位なものでも、參考にならうと思ふ。本論に述べた事と多少重複もあるが、參照の便を計つて、この譯文を外篇第一とする。年代は總て外國人に示すために西洋紀元を用ひた。

總論

何れの國民にも、其の國民性或は國の魂とも云ふべきものがあつて、其の運命を支配し、又色々の變化變遷の間にも、割合に變化しないものがある。それと同時に、又忘れてならぬことには、國民の發達には、其の歷史の事情や、他國民との接觸が大切な事になる。日本人は、二千年來の歷史の間、政治道德などで、色々の變化を經、又宗教の點では、他の物を多く取り入れた。其の文明の發達には、他國の影響が多く、其の宗教史は、常に他國からの輸入を受けた。然し日本人の精神は、これ等外來の勢力に對して、受け目で居たのみではなく、攝取順應に依つて種々複雜な現象を生じた。然しこの爲めに、自然獨立の發達を爲し得なかつた。其故に、日本宗教史の面白味は、種種雜多な外國の影響を受け、それを國民精神に同化して、其の交渉から色々の

結果を呈した點にある。大體で云へば、所謂る神道は社會の組織と結び付いて國民生活の骨となつて居る。これに皮と肉とを付けたのは、儒教の力であつて、其の社會的道德、人道的教訓は、日本人の道德觀念を明かにし、且つ社會的方面に秩序と組織とを與へた。これ等に加へて、佛教の感化は、宗教的感情を養ひ、理想の方面を發揮して、國民の生活に生氣を與へ、血液の循環を促した。これ等の三つは、國民の腦髓と心臟とで、色々の混合を造り出し、今日になつては、吾々日本人は、これを意識するとせざるとに係はらず、欲すると欲しないとに係はらず、この三つの影響を受け、同時に三宗教の信徒となつて居る。

從來の三教

時代の區分

この歷史全體を通觀して、六つの時代に分け得る。第一、日本古來の宗教は、天然の物事並に死んだ人々の靈を崇拜するにある。この宗教は、歷史の初まる頃には、社會の組織、種族制據の形勢と結び付いて、祖先崇拜の方面

に發達しつゝあつた。第二、六世紀佛教の輸入は、宗教發達の新紀元となり、この宗教は國民に色々な事を教へ、美術と文學と哲學とは、これと共に輸入せられた。第三、佛教輸入後六百年は、佛教同化の時代であつて、其の教理と儀式は、續々外國の輸入を受けたが、國民の感情並に生活も、其の影響を受けて、極めて佛教的色彩を帶びた國民文學は、十世紀以後、段々に興つて來た。第四、十三世紀は、政治の方面でも宗教の方でも、日本の歷史に著しい變遷の時代である。政權が王室から武門に移ると共に、新しい形の佛教が起つて、人民の心情を其の根底から動かした。それより以後三百年は、宗教も政治も　共に紛亂の狀態に陷つた。第五、十七世紀の初め、德川政府の樹立と共に、國家の統一と平和の時代に入り、宗教も亦平和を得た。但しこの平和は壓制に依つて維持したものである。この時代には、一方に儒教の興隆と神道の勃興が、著しい勢力となり、佛教は平和の惰眠を貪つた。第六、

宗教と國家

一八六八年の革命は、今までの平和を維持して來た勢力を顚覆し、それより以後、西洋文明の輸入と共に、今までの宗教に、キリスト教が加はつて、一層の混亂を經つゝある。

この變遷の間に日本の宗教は、曾て國教と云ふやうな組織や勢力を造り出したものがない。それに係はらず、政府の保護又は干渉、大名の歸依などが宗教の勢力を左右したことは少くない。何れの宗教團體も、皆多少は國家の保護を受ける有樣で、宗教の宣傳者は、何れも政府の保護又は有力者の保護を得ると云ふことを努めた。それにも係はらす、諸ての宗教を寛容することは、何れの時代にも著しく、又諸ての宗教を合併しやうと云ふやうな企ては、始終出て來た。

太古の信仰

一　古代の宗教

（約五五〇年迄）

日本人古來の信仰は、天然の物事や、人間に現はれる力、又は生命を崇拜するにあつた。未開人民の常として、何事でも、非常の事又は不思議な事は、神靈の所作として、これ等の神靈を神として崇拜した。其の神々の中には、善神もあれば惡神もあり、其の或る者は天上に居り、或る者は空中に住し、又或は草木其の他の物ゝ中に宿つて居る。人間は神靈の力を現はせば、神であり、又は神となり得る。或る神道家の云つた通りに、神代の神は、神代の人間であり、今の吾々は、人間時代の神である。而して、此等の神には、歷史の初まる頃には、種族の神として、其の祖先或は守護神となつて居た。此の宗教は、單に天然崇拜でもなければ、又靈魂崇拜でもなく、天然と人事と

は密接に相關係して、人と神と共に神話を作り上げ、歴史と神話とが相混合して、判別することは出來ない。其の神話、崇拜、儀式、道德觀念、社會組織などは、相密着して、人なる神と神なる人との歴史を造り上げてゐる。この宗教、幷に後代これと他の宗教と混合したものを總稱して、支那風にこれを神道と呼ぶ。但し神道を道べ又は教として整へたのは、後世の事である。

神道には、一定の宇宙觀又は世界説明と云ふものはないが、其の神話には、大分組織が出來てゐる。此に依れば、世界の初めに、混沌の狀態から色々の神々が生まれたと云ふ。其の中で、天御中主は中心になり、高産靈と神産靈と二柱の神が、生産繁殖の力を代表し、萬物の初めとなつてゐる。これに次で同じやうな神々が、各々獨立に相次で現はれた。夫婦の神の中で最も大切なのは、伊弉諾、伊弉册の二尊であつて、日本の島々を造り上げ、其の他色色の物事は、皆この二柱の神から生まれ出た。而して其等の物も、皆神と稱

せられて居る。然るにこの中で　女神は後に死靈となり、而して男神が産み、また神は最も重要な神靈である。其の一つは、光明と文明の神靈である天照大神であり、それに對して暴力勇氣の神は素戔雄尊である。天上の神々は、光明の神靈に忠義を盡して、暴力の神を罰し、これを流罪に處した。これに對して、惡靈は別に團結はしないが、或る場合には素戔雄尊の方に付いてゐる。この二つの神の對照は、これを押し詰めて行けば、ペルシャの宗教に於けるが如く二元教にもなり得たのであるが、日本の神話には、この二神は、此くの如き敵でなく、共に國土を經營し、皇室の祖先となられたと云ふ。この二神の調和關係は　一方には天地の溫和な方面と威力ある方面との調和を代表して、日本人の寛大な調和的精神を示し、これと同時に、建國の初めに於ける種族調和の跡を殘してゐる。日神の廣大な靈德と、天孫民族の同化力とは、此くの如く、その反對の勢力をも征服し、又同化したのである。

この時代には、何れの種族にも、其の祖先或は守護神があつて、其の中には、天然の力や、或は異靈あるものを神としてゐるものがある。各々の種族は、其の祖神或は守護神を崇拜するが、必要な場合には、他の神を崇拜することを妨げない。其の中で最も勝れたのは、天照大神であつて、其の背後には高產靈が現はれてゐる。これに對して素戔雄尊の子孫である大國主は、恐ろしい神、或は疫癘の神として、廣く崇拜せられた。此くの如く、日本大古の神傳には、二つ相反對した勢力の反對して居る形跡はあるが、歷史の初め頃には、其の宗教は明に天照大神を中心として、其の下には有らゆる神靈を崇拜するやうになつてゐる。天照大神の崇拜が、此くの如く盛んになつて來たのは、一方は社會の組織、國家の統一の反映であり、又一方には其の神德の然らしむる處である。此くの如くにして、此の最高神の崇拜は、社會の組織、國民の氣風の根本になると共に、又一般人民の宗教心に深い感化を與へ、大

神の崇拜は、歷史全體を通じて著しい勢力である。神道の長所は、この點にあつて、其の外見は多神教であるが、中心には力のある統一を保ち、而して其の信仰は、皇室の尊嚴に關係が深く、從つて社會團結の力や、民間の信仰行事と密着して居る。其故に、神道の變遷は、何時でも社會的幷に政治的方面と關係することが多く、教理とか哲學とか云ふ方面の發達は、極めて貧弱である。

此くの如き種族的宗教であるから、神道の道德は社會の習慣や、種族の關係を維持すると云ふことにある。即ち個人のみならず、又一家族でも、種族に比べては、論ずるに足りないものであつた。これ等の道德の教訓を組織し、社會並に政治の組織を整へるのは、後に儒教の力を借り、又思想信仰を哲學的に整へ、宗教の基礎を理想の上に建てるのは、佛教の助けを要した。要するに、神道の神道たる所以は、理想でなくして、事實にあり、組織でなくし

て、實行にある。神道家が、隨神道(ナムナガラノミチ)として誇るのは、此の點にある。

神道は神靈の崇拜であるが、奇妙な事には、人間の靈魂、又は未來の生存と云ふ事に就ての觀念は、明でない。死後の世界である黃泉國(ヨモツクニ)と云ふものがあつて、伊弉冊尊は其處で死の靈となつた。これに對して、天上の世界即ち高天原には、諸々の神々が天照大神を中心として居る。然し、吾々は死後此の何れかに行くとは限つてない。人間の靈魂には二部あつて、一つは力ある働きある荒御魂(アラミタマ)と、一つは溫和平靜の和御魂(ニギミタマ)とである。荒御魂は、時に人と別に現はれると云ふが、總べての人にこれがあるか、若しくは有力な人にのみあるか、明白に說いてない。何れにしても、靈魂といふ考へは、呼吸と關係があつて、タマシイと云ふシイは、風と云ふことである。其故に死ぬることは、シイヌであつて、呼吸が去ることであらう。

靈魂と來世

このやうな宗教であるから、其の儀式も簡單であつた。神々を崇拜するには、其の祠、若くは天然のものゝある所で行ふ。神には姿はなく、神靈を表はすには、鏡或は其の外神と關係ある物體で表はす。これに供へる物は、食物、酒、布の類である。そして神前に祈りを捧げ、祝詞(ノリト)を讀み上げ、或は舞踏をする。其の祭の中で、最も大切なのは、新穀を捧げる新嘗の祭と、穢れを拂ふ大祓とである。大祓は年に二度これを行つて、總べての穢れや禍を避ける祭である。まじなひや御守なども多く行はれ、占ひにも色々の種類があつたが、何れも簡單なものである。神や祭りに關係したものは、何れも靈の力があるとして、殊に惡靈を退けるに用ゐる。司祭は一定の家でこれを司つたが、他の人民も、同じく祭りを營み得る。

神道の儀禮

二　佛教傳來の時代

(約五五〇——八〇〇)

朝鮮半島との接觸交通は、種々の技術や文明の道具を、續々此の島國に持ち込んだ。其の第一に、支那文學の輸入は、多少讀み書きの事を知らせ、それと共に、高等な文明に對する渴望心を起させたに違ひない。但し宗教の信仰に就ては、恐らく何等の影響も受けなかつたであらう。然るに五世紀の中頃に、佛教の傳道は、半島の南の方に進み、日本と關係するやうになつて來た。此の新宗教は、初め朝鮮の移住民がこれを輸入し、多少日本人に感化を及ぼしつゝあつた。其等の土臺が出來た後、佛教は公に日本に入り來り、百濟王は、佛像及經卷を朝廷に奉つた(五三八又は五五二)。此等の貢物に上表が伴つて居て、佛教の功を述べ立てた。『是の法は、諸法の中に於て最も殊勝となす、この法は無量の福德を生じ、乃至、無上の菩提を成辨す　譬へば、人が如意寶珠を懷くが如く、この妙法の寶も亦然り、祈願情に依りて乏しき所なし。且つ夫れ遠く天竺より三韓に及び、教に依つて奉持して、尊敬せざるなし』といふが上表であつた。此等の言葉と、立派な佛像並に經卷佛具の美術品は、日本人に取つては、驚くべきものであつて、神といへば、人間の傑れたものと思ひ、質素な神社のみを見て居つた人民の目には、此等の美術品は、人間以上のものと見えたに違ひない。佛教は、元來出家行者の宗教であつて、其の精神は無神的又出世間的であつた　然るに、其の教が感化を及ぼした處では、人類平等の主義を實行し、又一切衆生が慈悲と理想とで合一することを目的とした。日本に入つて來た佛教は、此の教の複雜に發達したもので、美術的な儀式と觀念主義の哲學とが、それに伴つて居た。日本人は、この宗教に接して、初めて一切衆生の利益救濟を司る神があると云ふことを知つた。

又この信仰は、必ずしも種族や國民の區別に拘はらないと云ふことを知つた。又此くの如き神が、其の姿を現はして、美しい佛像となり、微妙な儀式でこれを祭るのを見て、驚嘆したに違ひない。

これ等の貢物が公に朝廷に奉られたので、朝廷は二派に分かれ、一方はこの新崇拜を容れやうとし、他はこれに反對した。其の議論の分れる處は、新に入つて來た外國の神は、今までの國神よりも優れて居るや否やと云ふにあつた。然し其の議論の裏面には、氏族の政爭や、又朝鮮に對する外交政策の違ひも籠つて居た。それより以後、五十年の間、この爭ひは結着せず、其の間には、新宗敎の運命も危く見えたこともあるが、其の傳道の背後には、大陸から渡つて來る傳道家、技術家、醫師、學者などの後援があつて、段々に勢力を得て來た。この場合に、當時の日本人の如く、幼稚な人民に對して、立派な儀式を營むことや、醫療を施すことが、大な力であつたことは、云ふまでもない。政府としては、公にこの宗敎を容れるに至らなかつたが、天子の中で、既に其の敎に歸依せられたもあり、殊に蘇我一族は新信仰の熱心家となつた。五八七年に反對黨の滅亡は、佛敎の進歩に大切なる件であつて、この事を紀念する爲めに、初めて官費で寺を建て、これを法興寺と名付けた。其外、段々に佛寺を建立するにつれて、佛像や美術品を輸入し、それと共に、傳道者、技術家が續々渡來した。これ等の建築美術に伴つて、慈善の事業も行はれ、五九三年に建てた寺（四天王寺）には、施藥、療病、悲田の三院を附屬してある（悲田院とは養老院の事）。これに類した寺院は、これより以後續々各地に起つた。

日本佛敎のコンスタンテノと稱すべき聖德太子が五九三年に、攝政の位置に上られた事は、佛敎の勝利を確め、佛法僧の三寶は、國民の信仰並に道德の根本となつた。僧侶學者を朝鮮から呼び寄せるのみならず、又支那大陸と

直接の交通を開き（六〇五年）、僧侶や學生を支那に留學させた。太子は、政治上に氏族の爭ひを統御して、國家を統一するに成功せられたのみならず、又深遠な思想家として著し、、殊に宗教の信仰に於て傑れた人であつた。其の所謂る憲法は、十七ヶ條あるが、國家組織の基礎を、精神の和合と道德の結合とに据ゑ、その外の教訓を施してある。太子は又宗教の教師として、佛教經文の講義をし、其等の講義は立派な漢文で書いて、今日まで殘つて、日本に於ける最初の佛教書となつて居る。其等に依て見ても、太子が佛教の哲學に通じ、佛陀の宗教に深い信心のあつた人たることを示す。又法隆寺にある夢殿（即ち觀心の堂）は、太子が冥想の爲めに、時々入室せられた處で、今日尙殘つて居て、太子の宗教心の深かつた跡を物語る。太子は、單に政治上佛教を保護せられたのみでなく、日本佛教第一の聖者として、聖德の名に値し、後世日本國中到る處に、太子堂を建てゝ人がこれを崇拜するのは、偶然ではない。

佛教の感化

功德回向

後世の佛教徒は、太子を觀音の化身だとするが、其の當時にも殆ど其位に思はれてゐたでのあらう。

佛教が日本に與へた新理想は、一切衆生の融和と、佛國に往生すると云ふ二點にあつて、太子自らがこの理想の代表者であつた。勿論、これ等の教は哲學の理論として一般人民に及びはしなかつたが、一切衆生に對する慈愛を說き、何れの人も皆救はれると云ふ宗教は、人生に對する廣い考へを與へ、又少くとも、何か此くの如き高尙な理想を求めたいと云ふ心を起させたに違ひない。

この感化の最も明白な實例は、太子の妃が太子の死後、其の冥福を祈る爲めに造られた佛像に現はれて居る。又妃は、それと共に、佛國の繪を畫かせたが、何れも皆幽明二界に亘つて、功德を共にし、同じく佛國の仲間入りをしやうと云ふ願を表はして居る。このやうな工合に死者の靈魂に對して功德を行

ふのは、之を死者の靈に捧げ、彼と我と、共に佛陀の慈悲に助けられ、菩提の路に進むと云ふ意味である。又其の死者が、既に佛國に生まれて居るならば、其の功德をこちらに分け與へられやうと云ふ事になる。これを功德回向と稱し、其の考へと實行とは、佛敎輸入後、何れの時代を通じても、日本人の宗敎心を支配した大勢力である。今までの祖神或は守護神の崇拜は、この觀念で一層廣い意味を得、又一切衆生と精神を共にすると云ふ高い方に進んだ。日本人の祖先崇拜は、單に祈願又は鎭めの爲めの崇拜でなく、一切衆生に對する廣い同情、一切の精靈に對する深い尊敬の發表であつて、その心を、最も直接には祖先に對して發表する。この意味での回向は、佛陀に對して發すれば、信心信仰を表はすことになり、聖者師主の恩德に對して發表すれば、彼等との交通を實現する所以であり、死者の靈に對して行へば、即ち祖先崇拜となる。この回向は、又地獄其他に居る死靈、又は動植物に捧げて、彼等

と共に菩提を早めると云ふ信仰にもなる。佛敎の讀經儀式の終りには、此の意味を云ひ表はす言葉を唱へる、即ち其の文は、『願くは此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に、佛道を成ぜん』と云ふのである。

この融和の理想、合一の希望は、日本人に對しては、抽象の敎へでなく、具體の儀式で感化を及ぼし、壁畫や彫刻で飾つた殿堂の中に、音樂合奏讀經禮讃の儀式を營み、この融合を現在にも現はさうとする。殿堂の中心には、佛陀の像があり、其の周圍には菩薩聖者の像を並べ、周圍の壁畫や彫刻は、佛國の大集會を畫く。殿堂は、通常中央に所謂る金堂があり、其のぐるりには、塔や祠堂があつて、それ等を圍んで、更に廻廊がある。この設計は、佛陀を中心として一切衆生が一つの仲間になつてる事を示す。此くの如くにして、佛敎傳道の有力な力は、精神の感化と共に、寺院建立、其の他美術上の仕事にあり、美術と工藝の方法に依て、人民の感情を磨き上げて來た。日

本の文明は、佛教を容れると共に非常な進歩を爲したが、それが爲めに、日本固有の宗教は、十分に又自由に發達することを得ないやうになつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

聖德太子以後、二百年の間（特に所謂る奈良朝）、首府並に地方に於ける佛僧の活動は、目醒しいものであつて、其の勢力は段々地方に及んだ。或は道路を造り、橋梁を架し、池を造り、水を導き、或は又山路を開き、田地を開拓し、藥草を植ゑるなど、傳道事業は着々行はれた。さうしてこの傳道の中心は、何時でも皇室にあつて、國家の安寧と皇位の隆昌とは、一に佛陀並に諸天神の守護に依ると云ふ考へであつた。其の意味で、佛天の爲めに殿堂を建て、經文の寫本を各州に配布し、此等の經文佛像のある所は、即ち諸天の守護があると信じた。此くの如きは、單に迷信の行ひでなく、其等の傳道を中心として、幾分か教育を施し、慈善や施療の仕事を行つた。さうして此等

の恩惠は、人民から見れば、佛教と同時に、國家に對する感謝の情になる。各州に建てた寺は、これを國分寺と呼び、國分寺の立派な建築に對し、又その事業に對して、人民の驚嘆感謝は、皇室並に佛教に對する悅服の情を養ひ得た。

佛教の興隆は、東大寺の建立で最も明白になつた。この寺は、佛陀の報身である盧舍那佛に捧げたものであつて、日本國の總國分寺として、首府奈良に建てられ、五十尺以上の大銅像は巍然として首府の東に聳えた。恰も此の佛像建立の時に、日本で初めて金鑛の發見があつた（七四九年）ので、其の金を以て佛像を塗り、聖武天皇は此の佛像を拜して　自ら三寶の奴と稱せられた。聖武の皇后光明子も亦、天皇に劣らず、信心を表はし、色々の慈善をせられた。傳說に據れば、佛陀が癩病患者の姿になつて、皇后の病院に入院したと云ふ。兎に角、此等の實例に倣つて、貴族等は續々寺を建て、僧に施

し、盛んに財を費した。

佛教の勢力は、此くの如く非常の進歩を成したが、其の裏面には、人民の國神に對する信仰は、力を失はずに居た。東大寺の建立が出來たのも、天照大神の許しを得てしたことになつて居る。其の許しと云ふのは、其の大神自らが佛陀の現はれであると云ふ託宣があつたと云ふ。この調和策は、佛教の發達に大きな影響を與へ、これから以後、佛教と神道との混合は、皆この託宣の例に倣つた。佛教が此くの如き調和策を採つたのは、其の傳道法の自然の結果であつて、理論や教理を貫くのでなく、美術や慈善を主とし、直接の利益を手段としたのであるから、今までの神々も、それと同樣に勢力を維持したのは、自然の勢ひである。勿論佛教には哲學の教もあり、又僧俗共に道德の規律をも與へた。然しながら、此の教へと道德とは、救ひと云ふ理想と十分に結合して居ないで、宗教の人心を惹き付ける力は、眞個の悟りと云ふ

よりは、寧ろ佛國往生、或は又現世利益と云ふ點にあつた。

この時代の佛教美術は、主として繪畫と彫刻であつたが、これも要するに、當時の佛教の性質に基いた事で、佛教の感化は、有形の美術を離れなかつた。其の結果として出來た佛教の彫刻は、日本美術の最上の作であつて、後代これに及ぶ者はない。此くの如くにして、佛教は、日本人に美術の趣味を與へ、堅牢な建築に依て、住居の考へを一變し、又僧階制度の力に依て、社會の組織を堅くした。

三　政治の統一、宗教と文學との興隆

（約八〇〇——一二〇〇年）

七九四年、都を奈良から京都に移したのは、政治上國家統一の一時期を劃してゐるが、それと共に、佛教の中心も新都に移り、宗教の性質も共に變遷した。新都に近い比叡の山上に建つた延暦寺と、京都の市中なる東寺と、共に皇室の保護を受け、此れより以後、五百年の間、日本宗教の二つの中心となつた。この時、日本佛教史中最大の人物である最澄即ち傳教大師（七六七——八二二）と、空海即ち弘法大師（七七四——八三五）との二人は、八〇四年、支那に留學し、佛教の研究と共に、經典を請來した。これは佛教の發達に新な路を開く基であつて、この二人の齎した佛教は、共に神秘的の彩色を帶び、殊に空海の佛教は、印度教やペルシャ教などの分子を混合したもので

ある。これ等の佛教には、奈良時代の佛教に比べて、教理と理想と、宗教と哲學とが、一層密接してゐる。

最澄の教は、法華經に基いた佛教であつて、この經文では、佛陀は其の歴史上の人格以上、更に其の本性を開顯する。其の教に依れば、如實の道を示した歴史上の佛陀は、法即ち眞理其物であつて、一切の衆生、人天、餓鬼、畜生、其他、生物無生物も、悉く法の現はれであり、其等が皆佛陀如來の智慧と慈悲とに攝せられて、各々自ら本性を悟るやうになる。佛陀は、歴史上の人物として現はれ（應身）、又法性を其の體とし（法身）、並に彼を信ずる者に對しては、各々其の心に應じて色々に現はれる（報身）。この三つが佛の三身であつて、三身は一體であると云ふ。其故に、最澄の教に依れば、道德を修めるのも、觀念を修するのも、神秘を悟り、哲學の智慧を練るのも、皆この三身即一の佛陀に對する信仰を中心とすべきである。最澄が初めて比叡

空海の眞言佛教

山を中心とした佛教が實際朝廷や貴族の歸依を得たのは、其の神秘修法の方面にあつたが、宗教や哲學の他の方面も亦、この山上の寺院で之れを修養した。此くの如くにして、延暦寺は佛教の重要な中心となつて、其の後、佛教の種々の分派は、皆この山から流れ出た。

空海の佛教は、これに反して、萬有神的神秘の雲の中に、佛陀の人格を見失つたものであつて、宏大な理想主義と、極端な物質主義とを一つにしたものである。この佛教では殆ど歴史的の佛陀を眼中に置かず、佛陀と云へば、其の本體は物質と精神とを包含したる世界其物に外ならぬ。此の佛陀の身は、精神物質一切を一つにしたものであつて、塵埃の末に至るまで、何物の中にも佛陀は存在する。物質と精神、或は實在と現象など云ふ分別をするのは、人間の迷ひであるから、此の迷ひを超絶すれば、我には自らの中に佛陀を體現し、この身體の生活で佛陀の働きを現はし得る（即身成佛）。佛身は至

る所に活動して居るから、其の力や効能を呼び出すには、身體と言語と精神との三方面の秘密法（三密）を修すれば足りる。この秘密は、或は呪文或は呪印などで出來ることであるから、其等の密義を教理に整へ、それを表象的に又は神秘的に解釋し、何事でも皆この神秘の中に修めて盡きる所はない。この佛教が、貴族のみならず、一般人民に勢力を得たのは、此等の點にある。空海の熱心と布教方法とは、段々に最澄の勢力を凌いで、遂には最澄の門人等をして、この神秘佛教を摸倣し、後塵を拜せしむるに至つた。此くの如くにして、是より後四百年間の日本佛教は、眞言秘密の佛教となつた。其の複雜な儀式誦經呪文の聲と共に、壇上に火を燃やし、油を注ぎ、香を焚き、振鈴の音は油の燃える音と一緒になる。此くの如き修法は、人の心を恍惚たらしめて、天國が地上に降つたかと云ふ感を抱かしめる。朝廷や貴族の宮殿には、佛壇を莊嚴して修法の場となし、百姓の家には、呪文呪符を貼り付け、

路傍には梵字を彫り付けた石を建て、日本國中、眞言佛教の國となつた。

貴族佛教

政治上の統一、朝廷の威嚴と共に、貴族の奢侈、寺院の尊嚴は益々加はつて、秘密佛教の二派、共に國教の力と尊嚴とを得るやうになつた。佛教の儀式修法は、朝廷や貴族の家で毎日の行事となり、方々の寺々に於ける講義や説法は、貴賤男女の聽衆を雲の如く惹き付けた。僧正僧官は、貴族の如くなり、其の勢力は政治や兵事に及んだ。

兩部神道

此くの如く、佛教の勢力が盛んであつたに拘はらず、古來の神々に對する信仰は、人民の間に消えないで、佛教と神道との混合は、段々に組織を得て來た。此の方面で、傳教の企ては成功しなかつたが、弘法の眞言佛教は、神道の神々を佛教に引き入れるには、殊に都合が好かつた。即ち古來の神々は悉く佛教の佛菩薩の應現だと云ふ事になり、佛は本地であつて、神は垂迹だと云ふ事になつて、此の説明の下に兩部神道が出來上つた。これは神道の神

を佛教の大風呂敷に包んだものであるが、又佛教をこの國の因習や社會組織に順應したものである。此くの如き宗教には、折衷としての缺點、幷に亂雜の弊はあるが、又それと共に長所がないではなかつた。即ち第一には寛容の精神を示し、又古來の崇拜を、一層大きな觀念に取り入れたものである。從つて、兩部神道は、此より後の日本に大きな影響を及ぼし、其の中から色々の神道信仰を誘起し、一八六八年の維新に、此の混合を破壞したまでは、人心を支配して來た。

佛教は此くの如く勢力を及ぼし、又國民の信仰に順應したが、若し其の宗教が深く國民の感情に入らなかつたならば、其の勢力は表面に止まつたであらう。然るに佛教の與へた宏大な理想は、佛教美術の感化と伴つて、人民の同情を擴げ、又天然萬有に對する感情を深くする點では、最も成功した。この感化に依て生じた精神狀態は、『哀れ』と云ふ一語で表はす事が出來る。此

の感情は、八世紀の歌にも表はれてゐるが、平安四百年の文學は、此の情を以て一貫して居る。哀れと云ふのは、悲しいと云ふだけでなしに、物事に深い同情を持つ事である。此の時代の詩人は、何れも皆、天地萬有の動靜に人間自らの情緒を觀て、四季折々の移り變り、雨風月雪の變化と共に、心を動かした。闇夜に、さら〳〵と葦の葉のそよぐを聞いては、月の光を戀ひ慕ふと感じ、川水の流れ去つて復返らないのを見ては、人生の無情を觀じた。散らんばかりに咲き揃つた櫻花も、秋雨に霑ふた紅葉葉も、共に彼等の感じに觸れては、哀れを催ふさしめた。小說物語の作者は、婦人の心を得るに長じたあでやかな男にも同情を表すると共に、又返しのない戀に苦しみ、失戀の爲めに世を捨てた人に對しても、哀れを注いだ。此等の戀物語に於ける事柄には、何れも皆天地四季の變化を伴つて、雨や花などの變化と、戀人の心根とが常に伴つて居る。約して云へば、人間と人間とを結び付け、人間と天然

とを結び付ける同情の綱を哀れと云つたので、この情にはやさしい同情と深い悲哀の情調とが相離れず、又精神の融合に對する憧れと離れない。此くの如き文學は、一方に纖弱で多情多感の弊はあるが、それと共に人事や天然の變化に對する觀察の眼を養つたから、此の時代の文學は、其の點に於ては極めて寫實的である。

佛教の影響は、儀式や文學の外に、又智力的の方面にあつて、印度から持つて來た學術哲學の教育をも與へた。勿論人民一般に感化を及ぼしたのは、佛教の倫理や宇宙論ではないが、此の四五百年の間に、佛教の哲學は學者の間に入り、又多少獨創的の哲學論をも造り出した。此等の哲學思想は、今日以後西洋の哲學に接して、再び活氣を呈する時がないとは云へない。

人民の感情を濃かにし、哲學を教へ、寺院制度を整へ、富源を開發するなど、佛教が日本に與へた力は宏大なものであつて、其の結果は日本文明の花

儒教と法律制度

とも云ふべき平安朝の文明となつた。佛教は此くの如く勢力を逞うしたに拘はらず、法律制度や社會的道德の方面に於ては、不思議にも何事をも爲さなかつた。從つて道德の綱紀たる大義名分は眞言的佛教のために毀損を受けたこと甚しく、藤原氏の專横、院政の變態など、皆その間に養成せられた。これは印度人の性質を遺傳したもので、政治の組織や社會統一の力に於ては、佛教は最も弱い宗教である。

佛教の此の缺點を補つたのは、即ち儒教である。儒教には官尊民卑的な思想が多いが、元來社會の家長制度に基いた道德、幷に政治の思想が、其の中心となつて居る。道德上の觀念も理想も、皆治國平天下を目的とし、道德幷に教育と政治法制とを同一の事柄と見做し、此等の最後の根據は、天意を代表した王者の人格にあるとする。其故に儒教が日本に入つて後、最初に影響を及ぼしたのは、思想や哲學でなしは、法制の方面にあつた。六〇八年に聖德

道德上上下の離反

太子が海外に送り出した留學生は、法律政治の知識を齎らして歸朝し、所謂る大化新制(六四五年)の立案者となつた。六四五年から九〇七年に至る間(大化から延喜まで)に、屢々新制の發布があつたが、其等は人間の實際の感情や日常の道德には殆ど無關係であつて、大部分は、政治組織を整へたものである。平安朝に貴族社會の教育は、支那の方法に倣ひ、此くの如くにして儒教は、國家の道德教となつたが、國民の心情と理想とは、常に佛教の信仰で動いた。教育を受けた人の間にも、其の頭腦と心情との間には隔りがあり、上流と下層との間にも、一層大きな疎隔があつたのは、この爲めであつて、これが爲めに、遂に中央政府の瓦解を來たし、民族精神の復興、封建政治の興隆に路を開いた。